

---

# TRUMP?

四季 華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TRUMP?

### 【Nコード】

N0948Y

### 【作者名】

四季 華

### 【あらすじ】

この世界には妖達が蔓延っている。そう口々に伝えられたのは、今より何代前の人間達までだっただろう。

今や人々は妖を畏れることなく、非科学的なものとして笑い飛ばしているはずない、と。廃れていく現代において、その店は時代の流れに逆らって存在していた。

『四季文房具店』

又の名を、妖万屋。

ひっそりと建つ古ぼけた文房具店に、救いを求める人や妖は少ない。

妖万屋である四季春一と妖怪達が織り成すアクション・ファンタジ

↓

## プロローグ（前書き）

シリーズ、TRUMPの三部目です。

今作品だけでなく、前作も読んでいただけると幸いです。

## プロローグ

### プロローグ

この世界には妖怪が蔓延っている。

そう伝えられたのは今よりも何代も前の人間達までだった。今の人間達は、妖怪の存在など笑い飛ばす。いるはずない、と。先祖たちが作ったまやかしの存在だと。

しかし、妖怪は現存する。その息の根をひっそりと殺しながら。人間達に紛れ、その正体を隠しながら、この世界に棲んでいる。

人間達の無理な経済成長についていけなかった妖怪達は、今や世界の隅に追いやられている。本来共存していたはずの人間と妖怪は、人間主体の世界になったまま、今回っている。

人間と妖怪の均衡が崩れ、世界は不安定で無秩序な状態を保持していた。

そんな妖怪達が存在する現在の世界に、妖怪達の力になって立つという人間がいる。人間達に虐げられる妖怪達の力になり、道を踏み外し罪を犯す妖怪達を正す存在。それが四季文房具店副店主の四季春一である。

四季春一という一人の少年こそ、妖怪のみが放つ妖気という気を感じ取ることができ、それ故に妖怪と人間の間に立つ者である。妖万屋という看板を掲げ、日々妖怪と向き合っている。

彼をサポートするのは助手兼四季文房具店長の夏輝、そして春一の幼馴染である七紀文、五木琉妃香、少年課の藤刑事、情報屋の夢亜。

妖怪世界にも秩序がないわけではない。枢要院と呼ばれる妖怪世界の警察のような組織が妖怪達を取り締まっている。しかし、彼らも妖怪だけに、人間との争いの時には出られない。そんな時にも春一が動く。妖怪についての全ての揉め事に首をつっこんではそれら

を解決していく。それが四季春一の正体であり、妖万屋の仕事だった。

彼を支える二人の幼馴染。丈と琉妃香に加え春一の三人は、かつてトランプと呼ばれ恐れられた伝説のチームである。春一の「一」が表わす「エース」、丈が表わす「ジョーカー」、琉妃香の「妃」が表わす「クイーン」が切り札ということで、その名前がいつしか勝手につけられた。本人たちは不良とみられることに不満を感じていたが、今もそのチームワークに乱れが起こることもなく、寧ろ絆を深めながら事に当たっている。

春一は今日も自慢のバイクを駆りながら、妖怪と人間の間を取り持つ仕事に向かう。

「夏、海行こう」

日本の真ん中あたりに位置する県の西部地域にある数珠市。その小さい市の中に、四季文房具店という古ぼけた文房具店がある。家と店舗が一緒になっていて、一階は店舗、二階は居住スペースとなっていた。文房具店内には、小銭で買える鉛筆消しゴムから、諭吉が何人が要るほどの高級万年筆まで並べられていた。そして店舗へと直接階段でつながっている二階のダイニングでは、春一がソファにうなだれながら夏輝に話しかけていた。

四季春一。彼の垂れた目にはやる気が感じられず、短めに立った茶髪のサイドには銀色のメッシュが三本入っている。耳にはピアスが二つ、行儀よく並んでいた。服装はいたって不良で、胸元がはだけた黒いYシャツにジーンズをはいていた。百七十七センチという長身をソファに埋めて、だらけている。対する夏輝は細長の優しさであふれている目に、整った顔立ち。少し長めの黒い艶やかな髪をしっかり整え、白い清潔なYシャツと黒の折り目のついたズボンをはいていた。春一よりも十センチ背が高く、姿勢よく椅子に腰かけている。この二人の写真を額縁に入れるのなら、優等生と劣等生、そんなタイトルを付けて飾っておきたいくらいだ。

「もうすぐ九月ですよ？」

「まだ八月だ」

夏輝のいつもの敬語に、春一は堂々と返す。年齢で言ったら夏輝の方が七つ年上なのだが、彼はいつも敬語で喋る。妖関係になると春一が師匠になるからだ。彼の元来の癖というのものもある。

「数珠海岸の海の家は八月三十一日までやってる。つまり、明日までは海が開かれています。というわけで、行こう」

「何で突然」

「一言で言おう。暑いからだ」

今年の夏は猛暑日が続いた。夏の間、太陽はどうやら休むことをしなかったようで、日差しはさんと降り注ぎ、人々の体力と水分を奪った。涼を感じられるグッズが飛ぶように売れ、試しに四季文房具店でもアイスを売り始めてみたら即完売した。春一は「冬は肉まんかな」などと言っている。

九月を前にした現在でも猛暑は続き、夜になっても熱帯夜の毎日だった。

「何故今日なのです？」

「今日は特別暑い。そしてこの時期なら宿題に追われる学生諸君が家に閉じこもっているから、海も空いてきただろうという俺の推理による」

「ハルじゃないんですから、みんな宿題はもう終わらせてますよ」

「俺は小学校から高校まで、宿題を夏休みの最後にやったことはない」

「どうせ、そもそも宿題をやらなかったんでしょ？」

「小学校一年生の時は怒られたが、二年目からは先生たちも諦めて何も言われなくなった」

「はあ、と溜息をつく夏輝に舌を出してから、春一はようやくソファから腰を浮かした。

「とにかく、俺はもう海モードだから、海に行こう」



かくして、春一達は海へと乗り出した。海はまだ人がいっぱいいて、砂浜のそこかしこにパラソルやシートが敷いてある。

「おー、俺海久しぶりだよ！」

「ハル、誘ってくれてありがとうー」

幼馴染の丈と琉妃香も誘ったら、二つ返事で来るといっているので、彼らも車に乗せて海にやってきた。丈は春一よりも明るい茶髪に黒いメッシュを三本入れ、幼さが残る顔ではしゃいでいる。琉妃香は肩の少し下まである金髪をカールさせて、その大きな瞳を輝かせている。

それぞれ水着に着替え、海の家近くの空いているスペースに腰を下ろす。

「お、おいジョー」

「あ、ああ、ハル」

春一と丈は二人でそわそわしていた。理由は琉妃香にある。

「二人とも何下ばっか見てんの？カニでもいるの？」

琉妃香のビキニ姿がとてつもなく可愛く、艶めかしさすら醸し出しているため、二人は今更になって幼馴染を直視できなくなったのだ。

「な、なあ、琉妃香ってあんなに女っぽかったっけ？」

「知らねーヨ！」

小声でこそと話している春一と丈に、琉妃香が近づく。すると二人とも顔を赤くして急いで視線を空へと逸らした。

「ははーん、さてはあたしの水着姿に見とれてるな？」

「んなわけねーだろ！お前の水着姿なんてしょっちゅう見てたしよ」

「そうだぜ、小学校も中学も一緒に水泳の授業やった口！」

「それスクール水着だろ！」

琉妃香が二人の頭を引つ叩く。二人は前につんのめって、そこを琉妃香に体当たりされて砂に倒れた。

「お前ら埋めてやるーか？」

悪戯っぽく笑う琉妃香に、二人はたじたじだった。

「あれ？夏兄水着じゃないの？」

春一と丈が顔を見合わせてどうしようかとしているときに、琉妃香が夏輝に話しかけた。夏兄というのは、琉妃香なりの呼び方だ。

当の夏輝は、ショートパンツにシャツを着て、ボタンはいつもよりも外しているものの、水着ではない。砂浜で観覧を決め込むらしい。

「もう海で遊ぶ年でもないのさ」

控えめに断る夏輝に、琉妃香はつまらなそうに足で砂をかけた。

夏輝は口の中に入った砂を吐き出している。

「ナツちゃん、ノリわりーナ」

「こいつ、名前は夏のくせに夏苦手なんだよ。暑いとすぐばてる」

「おもしろー」

「あたし海入ってくるよー」

琉妃香が一足先に海へと向かう。夏輝はシートの上に座り込んで、春一と丈は砂浜にうつぶせになって寝ている。

「女の子は元気だねー」

「若いしナ」

「それを言ったら私はどうなるんですか」

なんてくだらない会話を三人の男たちでしていると、水の中に入ってきた琉妃香に一人の男が近づいた。ナンパのつもりらしい。三人は特に心配もせず、それを見守っていた。琉妃香のことだから、その内平手打ちの一発でもかまして立ち去るだろう。

しばらく男の方が話していても、琉妃香は聞く耳を持たなかった。そっぱを向いて、小さい子供に手を振っている。そこで男が強引に琉妃香の手を掴んだ。すると、すかさず反対の手が男の頬に飛んで

きた。

「ほら、やつぱり」

「かわいいソー」

しかし、それでも男は諦めない。無理やり腕を引っ張って、琉妃香を連れて行くこうとする。

「行きますか」

春一がそういうと、丈と二人で男の方に近づく。春一が男の後ろからがしつと肩を組んで、丈が下から睨みを利かせる。

「こんちはー。俺らの幼馴染に何か用すか？」

「おにーさん、いい年こいてそんなことすると俺ら黙ってないっすヨ？」

「あああああ！」

二人が出ていくと、男は突如大きな声を出してその場にへたり込んだ。尻餅をつく格好になった男は、がくがくと震えて三人を指さしている。

「何？俺らまだ何もしてないけど」

「あ、あんたら、トランプだろ！すみませんでしたっ、トランプの方だとは知らずに……。オレ、中学の時アンタらに喧嘩売って返り討ちにされたんですよ、すみません、もうしません！」

三人は中学時代の記憶を一つずつ思い出していったが、どうにも出てこない。彼らに中学時代喧嘩を売って返り討ちにされた人間など、数知れない。

「あ、あのっ、オレその海の家店主なんです。何でもタダでいいんで、許してくださいっ」

そういつて男は海の家へと駆けこんだ。三人はぼかんとその場に立ち尽くした。

「きゃあっ!」

叫び声が上がったのは、四人が砂で山を作っていた時だった。琉妃香が砂で山を作ろうと言い出し、それならばトンネルを開通させようと丈が言い出し、そしてそれなら水が必要だと春一が言った。結果として、夏輝がバケツに水を汲みに出されたのだが、彼が水際から春一達の元へ帰るとき、叫び声が上がった。夏輝が振り返ると、一人の女の子が溺れていた。足を吊ったのか、腕を上にあけてもがいている。夏輝はすぐに海へ飛び込み、子供の元へと泳いだ。彼が子供に手を貸すと、女の子は安心したように力を抜いて、夏輝に体を預けた。

「もう大丈夫だよ」

そのまま岸まで泳ぐと、女の子の両親と春一達が彼らを迎えた。

「大丈夫か?」

「ええ。少し水を飲んでるようですが」

女の子は岸に座ると、何回か咳き込んで水を吐き出した。

「大丈夫?怖かったね」

夏輝が優しく言くと、女の子は彼の腹に抱き着いた。

「おい、犯罪だぞ」

「ハル!」

夏輝は女の子の頭を撫でながら、春一を睨みつけた。当の春一は女の子の頭を撫でて、素知らぬ顔をしている。

「どうしたの?足が吊ったのかな?」

「あのね、何か引つ張られたの」

「引つ張られた?」

夏輝の問いに、女の子はこくりと頷いた。自分の足を手で握る。

「こんな感じで、ぐいって引っ張られたの。それで海に引き込まれ  
そうになって」

「本当に？」

「うん」

女の子の目には微塵も嘘は感じられない。彼女は真っ直ぐな瞳で  
夏輝を見据えている。

「すみません、この子変なこと言って。気にしないでください」

「はあ」

母親は彼女の手を引いて、礼を述べて立ち去った。残された春一  
達は、互いに顔を見合わせて煮え切らない表情をしている。

「ちよつと調べるか」

その春一の言葉に、全員が頷いた。

海の家はそれなりに繁盛していた。ヤキソバや冷たい飲み物、かき氷などが売られていた。先ほど琉妃香をナンパした店主の男と、アルバイトとみられる高校生くらいの少年の二人で切り盛りしているようだった。

「かき氷四つ。ブルーハワイといちご二つずつ」

「ありがとうございます！」

少年は春一の注文に元気よく返事して、氷を削り始めた。程なくして赤と青のシロップがかかったかき氷が四つ出来上がった。四人はそれを店内で食べながら、店主の男に声をかけた。

「あのさ、この海で今までに事故とかあった？」

「え、そ、そんなないっすよ」

春一の問いに答える店主の男は、至って挙動不審で、怪しい。春一達がじと目で見据えると、男は居心地悪そうに体をもぞもぞと動かしながら、頭をぼりぼりと掻いた。

「ここだけの話にしてもらえますか？そうしないとオレの商売も上がったりですよ」

「そりゃあ、このマイナスになるようなことはしないよ。素直に話してくれば、だけどね」

春一が軽い脅しをかけると、男は顔をひきつらせて、春一達が座っているテーブルの方までやってきて、丈の隣に座った。そして、声を潜めて周囲を気にしながら話し出した。

「実は、最近変な事件が起きてるんすよ」

「事件？」

「はい。海で泳いでると、誰かに足を掴まれて水中へ引きずり込まれそうになるっていうんです。被害に遭った人たちは今夏だけで十

人くらいになると思います。でも、すぐに手を離されて、後は何にもないっていうから、事故にもならず終わってるんです。こっちは評判落とされちゃたまんないから、誰かの軽いいたずらでしょう、で終わらせてるんですが、それにしたって件数が多すぎる。今年だけですよ、こんなことが起きるの。今までは何にもなかったのに」

春一達は顔を見合わせた。やはり、女の子が言っていたことは本当だったのだ。

「ふーん、成程ねえ。嫌なおいがしやがるぜ」

春一は口で器用にスプーンをいじると、食べ終わったかき氷の皿にスプーンを置いた。そして立ち上がる。

「ちよいと調査してみますか」

春一と丈は海の中に入って様子を見ることにした。それぞれ少し距離を取って、様子をうかがう。試しに水の中に潜ってみても、変わったものは何もなかった。

「!!!」

そんな中、春一と丈がばつと同じ方向を見た。微かに感じられる妖気が、こちらに近づいてくる。妖気は歩くスピードで春一の方へと向かっている。春一は体勢を整えて、来るべき時を待った。

「来たなっ!」

春一が叫ぶ。彼の右足に手が絡まり、海の中へと引きずり込まれる。春一は敢えてそれに逆らわず、水中に潜って自分の足を掴んでいる手を逆に捕えた。目を凝らすと、相手は人魚のような姿かたちをした妖怪だった。長い髪に、半身が魚のように尻尾になっている。彼女はびくりと体を震わせて、逃げようとしたがそれを簡単に逃がす春一ではない。すぐに丈もやってきて、人魚は海上に顔を出した。「琉妃香、ボート持ってきて!」

春一が岸に向かって叫ぶと、琉妃香が小さめの筏のようなゴムボートを持ってきた。三人でそのゴムボートに乗って、人魚の話聞く。春一はもう手を離しているのだが、それでも彼女には逃げる気配がない。

「逃げる素振りがないってことは、観念したってことでいいのかな? ミス・マーメイド」

「ごめんなさい……」

人魚は下を向いたまま、小さな声で謝罪した。その双眸からは今にも涙が溢れ出しそうである。

「ごめんで済んだら枢要院いらないよ。何であんなことしたのさ?



「一步間違えれば事故になつてた」

「すみません……」

言葉を変えて再び謝罪する人魚に、春一ははあとため息をついて、頭を掻いた。彼は琉妃香以外の女が苦手である。

「俺も別に怒つてるわけじゃないんだ。素直に話してくれれば、それでいい」

彼なりに声音を優しく言うと、人魚は春一達を窺い見た。そして、意を決したように口を開いた。

「この海が汚くなったから……」

「この海が？」

「はい。私は見た通り人魚の妖怪です。私たちの種族は、綺麗な水がないと生きていけません。この海は最初、とても綺麗な海でした。だから私達もここに棲むことを決めました。でも……」

「汚くなつてしまった」

春一が言葉の続きを代わりに話すと、人魚は再び悲しそうな顔をして目を伏せた。

「そうです。人間達がこの海を荒らすようになって、私達の住処が段々狭まつていったんです。あそこに海の家があるでしょう？あそこの店主は、最近ごみを海に流すようになりました。処理が面倒になったのかは知れませんが、彼が私達の住処を小さくしているのは確かです。だから、小さな騒ぎを起こして、ここに人を近づけないようにしてやれと……。すみませんでした」

人魚の目から涙がぼろぼろと流れ落ちる。春一は困つたようにまた頭を掻いて、考えあぐねた結果、人差し指でそつと彼女の涙をぬぐった。

「俺が、協力しよう」

その一言に、人魚はぱつと顔を上げて春一を見た。その両目は驚きで開かれている。

「俺が、その店主にもう海を汚くしないように言っておこう」

「何で、そこまでしてくれるんですか？見ず知らずの妖怪のために

……」

「俺は妖万屋の四季春一。見ず知らずの妖怪のために動くのが仕事さ」

そういうと、人魚は笑顔になって、今度は嬉し涙をぽろぽろと流した。

「おいおい……俺は女の子に泣かれるとどうしたらいいかわかんないんだよ。琉妃香、こういう時はどうすればいいんだ？」

「そのままでもいいんだよ。見守ってあげれば」

「ふん」

困ったように頬をポリポリと掻く春一は、最後に人魚の頭にポンと手を載せて、笑いかけた。

「俺を信じて」

人魚は涙を流しながら、何度も何度も頷いた。

「いらつしゃいま、せ!？」

海の家に戻り行くと、店主の男が椅子に座って壁を背もたれにし、煙草をふかしながら新聞を読んでいた。新聞から目を上げると、恐ろしいほどににこやかな春一がいた。その後ろにはこれまたにこやかな丈と琉妃香。

「アンタさ、仮にもこの店主だろ? 海を汚すようなマネしちゃいけねーわな」

「えっ? 何でそれ知って……」

ひくついて煙草を落とす店主に、春一は一切の笑みを消し去って彼に詰め寄った。壁にバンと手をつけて、眉間に皺を寄せた目で店主を睨む。

「お前自身がこの海を汚さないこと。そして、客にもそれを厳しく言うこと。なんにしろ、この海をきれいな状態で保つこと。わかつた? それができなきゃ、俺ら黙ってないからね?」

「ひいつ……わかりました! すみません、もうしませんっ!」

店主は地べたに土下座して、何度も頭を下げた。それを見届けた春一達は、無表情から一変、にこやかになって店主に背を向けた。そして店からの去り際にアルバイト中の少年の肩に手をポンと置く。「喜ぶといい。君は頑張ってるから、今日から時給百円アップだぞうだ」

「えっ、マジすか!？」

「良かったな。頑張りはいつしか認められるものだ」

そのあと海の家には、嬉々とした表情の少年と、泣きつ面の店主とが残された。その後、春一達は海を満喫して帰路についた。



ここ数珠市には、北神大学ほくしんと呼ばれる大きな大学がある。市の北側を埋め尽くすほどの広大な敷地面積に、様々な学部学科。日本で一番レベルが高い大学として知られるこの大学は、学生達の憧れの的であった。よって北神大学の門をくぐる者も自然と注目を集めるのだが、その理由とは別の理由で周囲の注目を集めている生徒達であった。

「ジョー、琉妃香、今日二限って入ってる？」

「俺入ってねーヨ。空き時間」

「あたしもー。ハルは？」

「俺も入ってねーからさ、早めに学食行こうぜ。混む前に食っちまおう」

「さんせー」

「あたし何食べよっかな」

色とりどりの髪の毛に、あくまでも不良テイストな服のセンス。目が合ったら確実にすぐに逸らしてしまうような外見の三人組。トランプである。

彼らは高校が全員違ったものの、大学で再び一緒になることができた。大学に入ってから毎日一緒にいて、こうしてキャンパス内を歩く姿も、後期が始まった今ではすっかり馴染みのものとなった。「んじゃ俺これから発達心理学の授業だからー」

「おー、じゃあまた次の時間ナ」

「じゃあねー」

三人は一度別れ、春一は発達心理学が行われる教室へと足を向けた。そして、教室に入る前、彼は突然立ち止まった。

(妖気……?)

神経を澄ませると、教室の中から確かに妖気が漂っている。彼は慎重に一步を踏み出して、中に入った。階段教室となっている室内の中ほどに、外見は人間と何も変わらない、一人の少年がいた。

控えめな茶髪に、真面目そうな顔つき。服装も至って普通の大学生で、清楚だ。春一の対極にいるような、そんな少年だった。

「よう」

春一はそんな少年の隣に腰掛けて、彼に話しかけた。妖怪の少年は突然話しかけられたことに驚いたようだが、春一の顔を見るとすぐに笑顔になった。

「ああ、春一さんですよ？ 妖万屋の」

妖万屋、というワードを小声で言っ、少年は春一に会釈した。

今度は春一が少し驚いた。自分のことを既に知っているとは。

「俺のこと知ってるの？」

「僕、丹羽詞にほしなんです。僕らの種族が前に人間と揉め事を起こしたときに助けてくれましたよね」

「ああ、あの治癒力が高い種族の。確かに前に面倒見たっけ」

「僕は凜りんです。よろしく」

「改めまして、春一っす。よろしく、ハルでいいよ」

二人は握手を交わした。そこで、春一の頭に疑問がよぎる。

「あれ？ 前期にいたっけ？」

「僕、転入してきたんです。だから前期はいなかった」

「だよ、見てないもん。学科は何？」

「心理。ハル君は？」

「俺も心理なんだ。一緒だな」

「そっか。ハル君がいてくれてよかったよ。心強い」

「まあ、俺でも少しは役に立てるよ。例えば、数ある食堂でも二号館の一番うまい、とかの情報提供とかね」

「そうなんだ。今日行ってみるよ」

「二限空いてる？ 俺、行くんだけど一緒にどう？」

「ありがとう」



春一と凜は、それぞれ授業が終わった丈、琉妃香と落ち合った。

春一はそこで凜を二人に紹介して、一緒に食堂まで行った。

「このオムライスはお勧めだよ」

「へえ。じゃあ、オムライスにしようかな」

琉妃香の勧めに応じて、凜は早速食券を買い求めた。春一達もそれぞれ好きなものの食券を買う。中に入ってテーブルにつき、食事が到着するのを待つ。

「凜は何で転入してきたんだ？」

水を飲みながら、春一が凜に尋ねる。丈と琉妃香も興味津々に転入生を見ている。凜はちよつと困ったように笑って、「引越したんだ」と答えた。

「ふうん。どうせなら最初っから来ればよかったのに」

「急に決まったことだったから」

その後、運ばれてきた料理を食べ、食事を済ませた四人は、また授業へと散って行った。

「なあ、凜。わかってるよな？」

「大学変えたくらいで俺らから逃げれると思ってるんなよ？」

「はい、二択。煙草押し付けられるのと、金出すの、どっちがいい？」

夕方から夜へと変わった、そんな時間。北神大学近郊の公園では、凜が三人の男に囲まれていた。その内一人には目前に煙草を構えられていた。

「今日は、お金、持ってないんだ」

凜が恐る恐る言つと、男達は舌打ちをして、煙草を吸っていた男



が迷わず凜の顔に煙草を押し付けた。凜の悲鳴が公園内に木霊する。  
「何でかしんねーけど、お前はすぐ治っちゃうからな。こっちはやりたい放題だぜ」

「はい、もっかい二択。殴られるのと金出すの、どっちがいい？」

凜は溢れだす涙をぬぐうことすらできずに、胸倉を掴まれた。ふるふると首を振ると、容赦ない拳が彼の頬を打ち据えた。

「ダメだ、コイツ今日は金持ってねーよ」

「んじゃ適当に痛めつけて終わりにするか」

男はペツと煙草を吐き捨てると、倒れた凜の腹に蹴りを打ち込んだ。それを皮切りに、何重もの蹴りが凜の体にめり込んだ。

凜は男達が去った後も、公園で蹲り、ただ涙を流した。

次の日は、数学系の一般教養科目で凜と春一達が全員一緒になった。一限目の授業で、始業まではあと三十分強ある。凜は笑顔で三人と再会した。

「よう、凜」

春一が大あくびをしながら凜の横に座る。丈と琉妃香は一段下の席に座って、凜に朝の挨拶をした。

「おはよう」

「凜、何かあったのか？」

「え？」

春一の突然の問いに、凜は一瞬きよんとした。意味が分からず呆けていると、春一がポリポリと頭を掻いて溜息を吐き出した。

「まあ会って二日の奴に言いたくはねーかもしんねーけど、何かあったなら言えよ？」

「う、うん……」

自分が問題を抱えていることは、春一にはお見通しだったらしい。しかし凜は友人になったばかりの春一達に迷惑をかけることもできず、歯切れの悪い返事をして黙った。

「もし、ダチに迷惑かけるのが悪いつて思ってたんなら、そいつは考え過ぎってやつだぜ。迷惑かけるからこそ、ダチって言えるんだろ  
うが」

「またも見透かされていた。凜は遂に何も言えなくなって、ただ俯いた。」

「まあ、そんなに重く考えんなよ。もしダチだからってところで萎縮してんなら、俺に依頼をすればいい」

「依頼？」

「俺は妖万屋だぜ？妖からの依頼を遂行するのが仕事だ」

「あ……………」

そう言われると納得してしまう。凜は心の中で葛藤をしつつも、このことはいつまでも自分一人で抱え込むわけにもいかないと思い、事情を春一達に話すことにした。

「前の大学で一緒だった人達なんだけど……………」

「成程ねえ。そいつはちょっとばかり可愛げがねえ遊びだな」

「大学を変えたのも、それが理由なんだ。ここまで追ってくるとは思わなくて……………」

「そっか。よし、依頼は引き受けた。そいつらを黙らせればいいんだな？」

「で、でも、怖い人達だから、危ないよ？」

「修羅場なら潜り慣れてるんだよ」

二カッと自信満々で笑う春一に、凜は安心感を覚えて笑顔で頷き返した。

その日の帰り道、凜は春一達とは別方向のため、一人で歩いていた。すると、後ろからバイクの爆音が近づいてきた。まさかと思い振り返ると、凜の願いもむなしく、昨日も来た三人組だった。

「凜ちゃん、ちよつとツラ貸して？」

言われるがままに昨日と同じ公園に連れて行かれ、恐怖に身を縮まらせていたら、肩をドンと押されてフェンスに叩きつけられた。

「で、金は用意したんだよね？」

「昨日はなかったけど、今日はあるんだよねー？」

「俺らもそんな長い長い方じゃねえから、そろそろ出しといた方がいいよ？」

にやにやしながらにじり寄ってくる三人に、凜はカタカタと肩を震わせながら、喉の奥から声を絞り出した。

「きよ、今日もないよ……」

「ああ!？」

一人がガシャン、とフェンスを蹴って脅すと、もう一人が凜の胸倉を掴んで立たせた。そして思い切り殴る。

再びフェンスに叩きつけられた凜は、ぼろぼろと涙を流しながら、頬の痛みと口の中に広がる鉄の味に必死に耐えていた。

「凜、いい加減にしるよ!」

「いや、あのゼファーとケッチシブいね」

「……!？」

突然全く違う声が介入してきた。しかし、三人組の後ろから現れたあの人物はいい天気でも眺めるようにバイクを遠巻きに眺めている。

「で、お前らだな、俺らのダチを恐喝してるってのは。あのねー、

いい年こいてやることが狡い。大学生なら自分で働いて稼ぎなさい。お母さん泣いてるよ?」

「何だお前!」

「だから凜のダチだって。さっき言ったじゃん。質問のレベルが低すぎる」

「ああっ!?!」

一人が春一の胸倉を掴む。そのまま殴らんばかりの勢いだ。

「あのさ、服伸びるから離してくれろ?」

「ふざけんなっ!」

春一を殴ろうと腕を引いた瞬間、横から春一の左手がフックのようによつてきて、そのまま頭を掴み、その勢いで頭を地面に叩きつけた。

「がっ……」

「離してつて、言ったよね?」

春一の冷たい台詞がその場の空気を凍らせる。凜も、残りの二人も固まっている。

「どうする、凜?俺がその気になれば、残りの二人も片付けられるけど、やっっちゃおうか?」

「ああ?」

「ちよつと黙ってるよ。俺今凜と話してんだろ」

「なっ、テメツ」

春一に手で制され、口では突っかかるものの、いざ行動に出そうとすると地に沈んだ仲間を見てしまう。目の前の男は確実に自分たちよりも強い。

「何ならお前がこいつら殴ってもいいんだぜ?今までの仕返ししてやれよ」

「え……」

「お前が遭ってきた目をこいつらに味わわせてやるんだ」

凜はその言葉に衝撃を受けた。自分が遭ってきた目を逆に味わわせる。そんなことは考えていなかった。だが、今ならそれが可能だ。春一がいる。ならば

「で、でもね、ハル君。僕、やっぱりそういうのはいけないと思うんだ。ハル君の言うことが正しいのかもしれない。けど、僕の信条とは違う。僕は、闇雲に人を殴りたくない」

凜が春一の顔を窺いながらゆっくり言った。言い終わると、春一の顔を下から覗き込んだ。もしかしたら怒っているかもしれない。

「よく言った！」

しかし、春一は凜の予想とは全く違って、明るく笑っていた。

「ゴメン、ちょっと試した。それでこそ凜だ。やっぱりそうでなくちゃ」

凜とがしつと肩を組んで、春一は笑いかけた。一人でうんうんと頷いている。

「さて、お前ら、凜は見逃してくれるそうだが？あ、そこで寝てる人は凜を殴った罰ということだ」

「何さらつと締めようとしてんだテメエッ！」

「あれ？ダメ？」

しれつと言う春一に、残りの二人はぐつと詰まりつつも、このまま引き下がれない思いの方が勝り、春一達の前にずいっと詰め寄った。

「このまま黙ってる俺達じゃねえんだよ」

「お前ら、タダじゃ帰さねえ」

「うおー、このゼファーとケッチシブいな！」

「本当だ！ケッチはタンクに傷入ってるけどね」

「「!?!」」

再び突然に知らない声が介入してきた。二人がそうつと振り返ると、そこには黒いメツシユを入れた不良と、金髪の美少女がいた。

そして、目の前の銀メツシユ。

「ま、まさか……トランプッ!?」

「俺らのこと知ってたんだ?」

「もう伝説みたいなどこあるけどヨ」

「あたしがクイーンだよ」

不敵な笑みを浮かべる春一とは裏腹に、二人組はさーっと血の気が引くのを感じた。自分は、とてつもない人達に喧嘩を売ってしまったらしい。

「す、すみません、トランプだとは知らずに……」

「許してくださいっ」

「凜、どうするよ?俺らはお前の決定次第で動くぜ」

「……もう、二度とこんなことはしない?僕含め、他の人たちにもだ」

「しない、悪かったよ!」

「……なら、いいよ。許すまでにはまだ時間がかかるかもしれないけど、とにかく、今は行つていいよ」

凜の言葉を聞くと、二人は寝ているもう一人を起こして、バイクに跨って帰って行った。

「ハル君、ジヨー君、琉妃香ちゃん、ありがとう。おかげで助かったよ」

「当たり前だろ?気にすんなって」

「そーそー、ダチだしヨ?」

「友達が困ってる時は、助けるのが本当のダチってやつだよ!」

その言葉が嬉しくて、凜は不意に涙をこぼしそうになったが、今は泣く時ではなく笑う時だと思い直し、最高の笑顔を見せた。

四人はそのまま四季家へとやってきた。公園から近かったことと、凧の傷の手当てをするためだ。

「夏、手当してやって。俺は救急箱の場所すら知らないから」

「階段の収納スペースに置いてあると前も言ったでしょう」

「うるさいな。いいから手当て。早く」

「はい」

はあと溜息を吐き出して、救急箱を持ってくる。中から必要なものを取って、凧の手当てに取り掛かる。凧は若干の呻き声を発しつつも、我慢して手当てを受けていた。

「しかし、あなたたちはどれだけ有名な不良なんですか」

「不良じゃねーって」

「どこがですか」

「ナツちゃん、不良扱いは勘弁だぜ？俺らのどこがふりょーなんだってノ」

「そーだよ夏兄、ひどい」

「そんなに非難されても……」

「俺らだって好きにこうなったわけじゃねーっての」

「そうそう」

「じゃあ何故こんなことに？」

「そりゃあ………どっから話せばいいんだ？」

「ガキの頃かラ？」

三人で話し合った結果、三人が幼少期の頃から話すことになったらしい。夏輝と凧が待っていると、春一が腕を組んで話し始めた。トランプの結成について。





時は十二年前に遡る。春一達が小学校に入学した時代。髪もまだ全員黒く、ピアスも開いていなかった時。

三人は入学してクラスが一緒になると、すぐ仲良くなった。小学校一年生の頃はクラスメート全員が友達のようなものだが、この三人は特に仲が良かった。元々性格が似ているということもあり、学校にいる間も終わっても、三人は毎日一緒に遊んだ。

そうして一学期が過ぎ、二学期に入った時、事件は起きた。

春一と丈は、毎朝一緒に登校していた。琉妃香だけ家が別方向なので、登校だけは分かれていた。大方春一と丈のどちらかが寝坊をするので、いつも琉妃香が教室で二人を待っていた。そして今日も春一の寝坊のせいで遅れて教室にやってきた二人は、異変に気付いた。

いつもいるはずの席に、琉妃香がいないのだ。赤いランドセルはあるのに、琉妃香本人がいない。彼女は今日日直ではないはずだし、どこかへ行くなら他のクラスメートに言伝を頼むはずだ。

「ねえ、琉妃香知らねえ？」

春一が近くにいたクラスメートの男子に尋ねると、その子は困ったように目を逸らした。何かを知っている表情だ。

「おい、琉妃香どこだよ？」

丈が肩を掴んで揺さぶると、男の子は泣きそうな顔になって口を開いた。

「三年生に連れていかれたんだよ！五人くらい来て、琉妃香ちゃん連れて行っちゃった」

その言葉を聞いて、春一と丈の目が見開かれる。丈も相手を揺するのをやめ、放心状態で固まる。

「……どこ行った？おい、どこ行ったんだ！？」

春一が声を荒らげて聞くと、男の子は震える声で「プールの方」と言った。春一と丈はそれを聞か否や、すぐに駆け出した。

一年生の教室がある校舎の東側には、プールがある。プールはちよつと棟と棟の間にあるので、他の場所からは見えにくく、影になつている。

二人がプールの方に駆けつけると、柵に追い詰められた琉妃香と、それを取り囲む五人の三年生がいた。琉妃香は泣きそうになつていて、目に溜まつた涙が震えている。

「何してんだあつ！」

春一と丈が同時に叫ぶ。その声に琉妃香と三年生たちが一斉に二人を見る。

「琉妃香に何してんだ、テメエラ！」

丈が叫ぶと、三年生の中でも特に体の大きいリーダーが一步前へ出てきた。

「コイツが生意気だから話聞いてんだよ！弱いくせに薙刀なんてやって、調子乗つてるからな！あの木刀がないと何もできないくせに」

琉妃香は幼稚園の頃から薙刀を始めていた。その才能は早くから開花し、年上の相手でも琉妃香には敵わないほどだった。またスポーツも万能で、男子にも引けを取らないその運動神経と、小学校一年生とは思えない美貌で多くの生徒から憧れの目で見られていた。七歳という年でも、彼女に好意を持つ生徒は少なくなかった。

しかし、それは同時に妬みも生み出した。自分にはないものを持つている他人を、人は時に羨み、時に妬む。常に一番でありたいという子供らしい欲求を持つ一部の生徒にとって、琉妃香は妬みの対象だった。

三年生の内の一人が琉妃香の髪を引つ張ろうとするので、春一はその腕を掴んで止めた。この二人もスポーツをやらせたら万能だ。

力だつてそこら辺の上級生には負けない。

「お前ら、一年生が三年生に勝てると思つてんのか！」

「そうだ、こつちは五人もいるんだぞ！」

「だから何だよ……？」

春一がとても一年生とは思えない凄みを利かせて三年生の前に立ちはだかる。

「このっ……！」

春一に腕を掴まれていた三年生が、春一の腕を叩いた。春一は手を離し、その手を握り固めてその三年生の顔面を思い切り殴った。

「やったな！」

それに他の三年生が二人に殴りかかった。やはり相手は上級生だけあつて、強い。殴る拳は痛い、手を休めたらこちらが殴られる。春一と丈はぼろぼろになりながら、この喧嘩に勝利した。やられた三年生はめいめいに泣いて逃げ出し、後には三人が残された。

「あー………いってー」

「ちくしょー思い切り殴りやがッテ」

顔をごしごしと乱暴に手で拭つて、それでまた痛くなって顔を顰める。だが、二人は琉妃香に笑顔を見せた。

「琉妃香、大丈夫か？」

「何もされなかつた力？」

二人の笑顔がとても痛々しくて、琉妃香は大声を上げて泣いた。

春一と丈は最初、初めて見る琉妃香の涙に呆けていたが、すぐに自分たちが泣かせてしまったと思つて慌てふためいた。

「る、琉妃香！」

「悪かつたヨ、泣くなんて思つてなかつたカラ……」

おろおろするばかりの二人に、琉妃香はしゃくりあげながら首をぶんぶんと振った。

「ちが………違つたの。あたしのために………ごめ、ごめんね、ハル、ジヨー」

その言葉を聞くと、おろおろとしていた二人の態度が一変。二人

は太陽のように二カツと笑った。

「そんなの、何も悪かねーヨ」

「そうそう、こんなん痛くも痒くもねーし」

「お前さつき痛いつて言つてただ口！」

「そ……そんなん忘れたよ！」

ギャーギャーと騒ぐ二人に、琉妃香は自然と笑顔になった。それが嬉しくて、二人は言い合いを忘れて笑った。三人はひとしきり笑って、教室に戻った。

程なくして、三人は職員室に呼ばれ、春一と丈はこっぴどく叱られた。しかし琉妃香が庇ったため、時間はそれほど長くならなかった。

それからだ。琉妃香が薙刀だけでなく護身術や居合も覚え、二人を負かすまでになったのは。

彼らは琉妃香の涙をあれ以来一度も見ていない。腕つぶしもだが、心も強い女性なのだ。二人は信じている。その信頼こそが、琉妃香の心を強くする一番の要因なのだ。それは二人には言っていないが、言う必要もない。三人それぞれが皆同じことを思っていることは、見えないことだが火を見るより明らかだからだ。

今日は土曜日。日曜日に向け、夜更かしでも飲み明かしでも何でもできる曜日である。大学が休みの春一は、家で課題と向き合っていた。時折辞書を使いながら、英語とにらめっこをしている。

店を閉めた夏輝がダイニングに上がると、春一がシャーペンで頭をこつこつと叩きながらパソコンを立ち上げていた。

「少し休憩したらどうですか？すぐ夕飯を作ります」

「おう、そうするか。今日のメニューは？」

「ラザニアです」

「いいね」

春一は机の上を片付けて、ソファへと移った。テレビを見ながら夕飯が出来上がるのを待つ。今は時間的によこのチャンネルも夕方のニュースを伝えており、春一は適当に局を選んでそれをぼうつと眺めた。

「続いて、県内ニュースです。昨日の深夜、数珠市の山で自動車の事故が発生しました。車はガードレールを突き破り谷底に落下。運転をしていた山路透さん、二十一歳が重傷を負いました。この山での事故は今月に入りすでに八件目ということで、県警では注意を呼びかけています」

（事故か……。今月が始まってまだ半分……。それで八件は多すぎる。何か事件が絡んでるのか？）

春一は若干眉間に皺を寄せたが、自分の考え過ぎだと頭を振った。

「どうかしたんですか？」

スープを運んでいた夏輝が春一に声をかけた。

「ん、ああ。県内で事故が続発してるってんで、運転するとき気をつけねえとなって思ってたさ」

「ああ、数珠峠で発生している連続事故ですよね？前を走るシルビアに勝負を仕掛けられて、それに乗ってしまうと事故をしてしまうっていう……」

「そうなのか？」

「ネットに載っていましたよ。最近巷を騒がせているので、情報もそれなりに多くあります。尤も、信憑性には欠けますが」

「ふ〜ん……」

春一は顎に手を当てて考えていたが、その考えはチャイムの音で消された。すぐに夏輝が玄関へと出ていく。すると、少しして傷だらけの男を連れてやってきた。

「ハル、事故の被害者の方です。妖のことで相談があると」

「……話を聞こう」



夕飯は後回しになってしまった。今数珠市で頻発している、峠での自動車事故。その被害者である男性が四季文房具店を訪れたからだ。

「もう閉店してるのに上り込んで、すみません」

やってきた彼は、二十代前半くらいで体のいたるところに傷を作り、包帯を巻いている。見るからに痛々しい風貌の男は、時間外に来てしまったことを詫びてから、勧められた椅子に腰を下ろした。夏輝がすぐにコーヒーを差し出すと、彼は一礼してそれを飲んだ。

「えと、君は……？」

男が春一のことを見て問いかける。夏輝はすぐに誓約書を取り出して、彼の前に置いた。誓約書の内容は、第一に「どんな人間が事件を調査しても文句を言わないこと」と若干不吉な文章が書かれ、その下には、依頼人は調査に協力をするようにとの事務的な事柄が何項かに渡って書かれていた。

「一筆いただけますでしょうか？」

夏輝がモンブランのボールペンを差し出すと、彼は戸惑いながらもそれにサインした。それを見届けた春一が、一つ咳払いをして姿勢を正す。

「店主の四季春一です。よろしくお願ひします」

男は一瞬固まった。何を言われているのかわからない様子だ。そんな彼のことなどまるで無視した春一が、誓約書を摘み上げてサインの欄を見る。

「良じょうさんね。改めましてこんばんは。ようこそ四季文房具店へ」

「君が……店主？」

「ええ。文房具店の店主はそこにいる夏ですが、妖万屋においての

店主は僕です。夏は助手」

「いまだに信じられないという風にぎこちない良を、春一は例の如く無視して依頼の内容へと移った。

「それで、ご依頼は？今回の連続事故絡みということですが」

「は、はい……」

良はやつと頷いて、その口を開いた。

「俺は、走り屋チーム『Noisy Road』のもんなんだけど、最近俺らが使ってる峠で事故が起こってるんです。ニュースとかでもやってるかもしれないですけど……」

「ニュースで見ました。詳しくお聞かせ願えますか？」

「はい。俺のチーム内でも五人が被害に遭ってます。前を走る白いシルビアが勝負を吹っかけてくるんです。それで、それに乗って走っていると……突然、そいつが消えるんです！前を走ってるはずのシルビアが急に消えて、そうやってパニクってる内に事故して……」

「本当、みんな妖怪か幽霊の仕業じゃないかって……。この件、お願いできますか？」

「お引き受けしましょう」

春一の自信満々な笑みが、不安でたまらない良を安心させた。

夏輝はその夜、山道を車で走っていた。例の事件の調査をするため、一番新しい事故の現場へと向かっている最中だった。

すると、彼が運転する車の前に、一台の白い車が現れた。

(幸か不幸か、出会ってしまったとは……)

夏輝は車に明るくはないが、目の前の車が例の車だということはわかる。最大限の注意を払いながら、後ろについて走る。

(あれは……!)

前を走るシルビアが、窓から手を出して挑発してくる。バトルを仕掛けているのだ。

夏輝は迷った。ここで勝負に載って妖を試すべきか、安全を第一に考え乗らないべきか。少しの間考えた結果、このまま様子を見てみようという結論に達した。勝負には乗らず、このまま後ろを走ってみる。妖の出方を窺う。

しばらく走ると、シルビアは再度挑発をしてきた。夏輝はそれに乗らず、追従を続けた。山は下りに入り、そろそろ事故現場だ。夏輝は事故現場まで行ったら車を路肩に停めようと考えていた。その刹那 彼の前から、シルビアが消えた。車のライトが照らすのは、夜の闇だけだ。

そこで夏輝は異変に気が付いた。確かに今は夜だ。視界は悪い。だが、見えなさすぎる。黒いマジックで塗りつぶしたような、違和感のある黒い闇が目の前に広がっている。

これは変だと理論でなく直感で気付いた夏輝は、すぐに車を左へ寄せて停車しようとした。しかし、遅すぎた。

闇の後に突如現れたのは、白いガードレール。

「しま……っ!」

急ハンドルを切り、ブレーキを目いっぱい踏み込む。しかし車はもちろんすぐには止まらず、そのままガードレールに衝突した。その衝撃で、夏輝の意識は途切れかかった。しかし彼は力を振り絞り、何とか顔を上げた。すると、黒い闇の中を白いシルビアが走っている。夏輝が見えた。さっきまでとは違い、周りも薄暗くはあるが、見えている。夏輝はそれを確認すると、静かにまどろむ意識の中へと落ちて行った。

春一が病院から知らせを受けて飛んでいくと、ベッドには傷だらけの夏輝が寝ていた。まだ意識は戻らないらしい。

春一はベッドの脇にヘルメットを置いて、椅子に腰かけた。ギシ、と椅子が軋む音やけにうるさく聞こえる。

しばらく座っていると、部屋のドアがノックされて、医師と看護師が入ってきた。春一は立って会釈して、医師の言葉を待った。

「同居人の方ですか？」

「はい」

医師は頷いて、傷の具合を話し始めた。

「内臓や脳に損傷はありませんが、打撲がひどく、肋骨と鎖骨を骨折しています。意識はもう少しで戻るでしょう」

「そうですか。ありがとうございます」

春一が頭を下げると、医師は軽く頭を下げて部屋から出て行った。それからしばらくすると、夏輝が軽い呻き声を上げた。春一はすぐに立ち上がってベッドのそばに寄った。

「ハ……ル」

「夏、大丈夫か？」

「はい……。すみません、車を壊してしまいました……」

「お前な、こんな時になんだけど、殴るぞ？んなことどうだっていいっての。……無事で良かった……!!」

心から安堵の表情を浮かべる春一に、夏輝は「すみません」という言葉を発しかけて飲み込んだ。

「ハル、今回の事件ですが……」

「事件のことは忘れる。今のお前は妖万屋である前に患者なんだから」

「いえ、言わせてください。私はハルの助手ですから」

「お前ってそういう所頑固だよなー」

春一はため息をついて、頭をぼりぼりと掻いた。少し躊躇った後、「聞こう」と言った。

夏輝は自分が見たものの全てを春一に話した。妖怪の乗る白いシルビア、そしてそれが不自然なほど暗い闇に消えたこと、事故をした後に走り去るシルビアを見たこと、一つの情報も漏らさず、詳細を伝えた。

「わかった。お前の調査結果は無駄にしねえ。後は俺に任せて、療養しろ」

「はい、ありがとうございます」

春一は頷いて、ヘルメットを手にした。

「また来るよ、じゃあな」

それだけ言って、彼は部屋を出た。

「久しぶり、由良さん」

「おーっ、ハル坊、元気してた？」

「元気つすよ。由良さんは？店繁盛してますか？」

「おかげさまでね」

春一がやってきたのは、一件の中古車シヨップ。中古車販売から車の修理・整備まで行っているその販売店で、春一と彼よりも十歳ほど年上と見られる女性が話している。

由良と呼ばれたその女性は、長い髪を後ろに流し、前髪は赤く染めていた。スタイリツシユなスーツに身を包み、大人の雰囲気醸し出している。彼女はこの中古車シヨップの代表取締役であり、そして春一の知り合いでもあった。

「どうしたの、ハル坊？パーツでも見に来た？」

「いやそれが、事故で車オシヤカになっちまって……」

「事故！？大丈夫なの？」

「事故つたのは俺じゃないから、俺は大丈夫なんだけどね。車が全損イッちまったから、ちょっと見してもらおうと思つて」

「そっか。そういうことならゆっくり見てつて。ハル坊なら安くしとくよ」

「ありがと」

春一は由良と一緒に車を見て回つた。メーカーは問わず、たくさんの車種がある。プレジデントやキャデラック、GTR、FD、インプレッサ、レガシイ、ハコスカ、コルベット……普通の乗用車はないが、VIPカーやアメ車、旧車まで、様々な車を取り揃えられている。

「何にしようかな」

春一はウキウキとした表情で、店の隅々まで車を見て回った。そして、一つの倉庫の前で立ち止まった。倉庫はシャッターが半開きになっており、そこから一台の車が顔をのぞかせていた。

「まだ、大事に取ってあるんだね、このFC」

春一の顔に、ふつと悲しみの影が落ちる。倉庫に入っている真っ白なFC。今にも動き出しそうで、良く手入れされている。

「捨てられないよ……この車は」

「もう、四年も経つんだね。あれから」

「四年……か。そうだね。あの時はハル坊もジョーも琉妃香もまだ中学生で……」

由良が言葉に詰まる。込み上げる涙を必死に堪えて顔を上げる。

「思い出させてゴメン」

「いいの。それに、思い出は思い出さないとなくなっちゃうから」

由良の無理な笑顔に春一は目を伏せて、FCを見た。

(秋志……何で、由良さん残して逝っちまったんだよ?)



中学三年生になるまでに、春一、丈、琉妃香の三人は数々の喧嘩を買ってきた。それは彼らを「不良」と位置付けるには十分であり、世間が彼らに冷たく接する理由としては領けるものだった。今まで友達だった者の目は冷たく、態度は余所余所しくなった。

しかしそれは、必然的に三人が結束するという結果になった。それぞれがそれぞれの拠り所に。いつの間にか三人だけでいるのが普通になっていった。

学校はいつしか行かなくなり、昼夜三人で行動するのが当たり前になった。

だが、彼らは決して自ら喧嘩を売ったことはない。こちら側から手を出すことなどいくらでもあるが、彼らが喧嘩をする時と言えば、相手が誰かを虐げている時や、向こうが三人の内の誰かに手を出そうとした時だけだ。喧嘩を売られても基本的には相手をしなかったが、相手が誰かに手を出そうとすると（特に琉妃香）系がいと簡単に切れるため、すぐ喧嘩に発展した。

煙草も酒もやらなかった。元々、「トランプ」なんて名前を付けられるのも不本意だった。有名になればなるほど、敵は増えた。そのたびに誤解は増えた。

警察の厄介になることも珍しくはなかった……どころか、むしろ常連だった。年も増すごとにそれは多くなり、本格味を帯びてきた。警察に連れて行かれそうになると、春一と丈はまず琉妃香を逃がした。琉妃香は常々不平を言っていた。自分だけ助かるのは不公平だと。しかし、二人は頑として聞き入れなかった。琉妃香は絶対捕まらせたくない。それが二人の願いで、琉妃香は二人が一度決めたことを譲らないということを知っていたし、何度講義しても無駄だ

った。故に、トランプが三人組だということを知っている人間は少ない。彼らと直接会っていないければ知らないだろう。

「またお前らか！」

「うっせーな、こっちだって来たかねーよ！テメーらが連れてくるだろが！」

「そーだヨ！来てほしくなかったら連れてくんのやめりゃいいじゃねーか！」

警察署の少年課で、椅子にふんぞり返って座り、文句を垂れる二人に刑事は机をドンと叩いた。

「オメーら静かにしやがれ！」

「じゃあまずテメーが静かにしろよ！」

「黙らせてやんか！」

「んだと！」

いつものやり取りが続いたある日。いつもとは違う光景がそこに介入してきた。

「おうおう、威勢のいい奴らだな。聞くまでもなく元気だな」

「誰だテメー！」

「俺らに何の用だヨ！」

「ちったあ落ち着けよ……。俺は秋志。少年課の刑事よ」

それが、初めての出会いだった。

秋志と名乗ったのは、二十代後半くらいだろうか、若者だった。短く立った黒髪に、黒く丸いサングラス。背は高く、百八十センチに届こうかという長身だ。快活で、笑い顔がよく似合う。尤も、目は隠れているのだが。

「んだよ、俺ら年少送りにしようって気が！」

「上等だ、してみるヨ！」

「んな気はねえよ。とりあえず落ち着けてんだろ。俺は知ってんだぜ？お前らのことをよ」

「俺らの何知ってんだヨ！初めて会ったくせにヨ！」

「ホラ吹きかテメー！」

秋志はやれやれと溜息をついて肩を落とした。幅の広い肩が垂れ下がる。

「お前らは本当に悪いことはしちやいねーんだよな。お前らが喧嘩を吹っかける時は決まって誰かを助けるためだ。正義のヒーローって言えば聞こえはいいか？」

二人の目が点になる。それはそうだ。今まで否定しかされてこなかった自分達の行動が、初めて理解された。

「お前ら根はいい奴なんだよな。お前らの仲間、もう一人いんだろ？美人な女の子」

「琉妃香に何しよーって気だ！」

「手え出したらタダじゃおかねえゾ！」

「だーかーらー」

秋志は面倒くさそうに一語一語を伸ばして二人に顔を近づけた。

「再三言っぞ、落ち着け。お前らどんだけ血の気多いのよ？お前らのお姫様に手は出さん。何もしてない」

それだけ聞いて、二人の怒り肩が少し落ち着く。

「お前らの仲間の女の子も同じだ。本当に悪いことはしてない。更にお前らはその子を絶対に逃がしてる。まあ、女の子の方はしてることも少ないから、お前らに比べれば大分マシだけどな。随分オツトコ前じゃん？」

「オイ」

椅子にどっかりと座って足を組む秋志に、春一が立ち上がってズイと威圧した。周りの刑事達は臨戦態勢に入っている。

「俺らおちよくって何が楽しいんよ？そんなに喧嘩買ってほしいんなら、買ってやんぜ！」

血管を浮き上がらせる春一に対し、秋志は立って彼を見下ろした。春一の肩をドンと押し、無理やり座らせた。

「これが最後だ。落ち着け。俺はお前らのことをおちよくってるわけじゃない。認めてんだ」

再び立ち上がるうとした春一の動きが止まる。隣で丈も止まっている。自分達のしたことが認められるなど、初めての経験だった。

「けどな、お前らのしてることはあんまり褒められるものでもねえ。確かに間違っちゃいねえが、正解でもねえ。その力、もっと違つとこに使え」

二人は打ちひしがれた。今まで彼らを相手にしてきた刑事達はみな口々に怒鳴りつけ、同じことを言った。彼らはそれに反発し、時に殴り掛かった。だが、秋志には声静かに諭され、それに心を挫かれた。

間違つてはいない。だが、正解でもない。

「女の子にもさつき会ってきたよ。だから遅れたんだが……。あの子もお前らと一緒に根はいい子だった。んでもって、お前らと一緒に俺に噛みついてきた。『ハルとジョーに何かしたのか』ってな。

お前ら三人、似た者同士だ」

そこで秋志はサングラスの奥の目を覗かせ、笑った。

「お前らの結束力がありゃ、きつと俺らみたいな警察には屈しない

だろう。これからずっとこんなことを繰り返すこともできるだろう。……けどな、俺はそれと同じくらい、お前らがまっとうに生きていける可能性があると思う。そんなでもって俺は、そっちの方が楽しいだろうとも思う。監獄に入って三人別々になるよりは、青空の下で一緒になつてた方が断然いい。そう思わないか？」

春一と丈は黙った。こんな、自分達を抑えるために適當を言っているに決まつている。そうやってわかつたフリをして、結局は信じていない。扉の外に出れば、「あんな奴ら社会のゴミだ」と言うに決まつている。

だが、二人は齒を噛みしめるだけで、それを言動に出すことができなかつた。いつもなら殴り掛かる乃至、声を荒らげているなりしているはずだ。なのに、今回はそれができなかつた。何故かはわからない。秋志という人間が持つ雰囲気。そうとしか言えなかつた。

「ハツハツハ！」

いきなり秋志が笑つた。二人は何事かと、彼を見上げた。

「お前らおもしれーよ！まるで女の子と同じ反応するんだもんなあ。お前ら三人の結束力、実はちよつとだけみくびつた。悪かつた。

……正直言つとな、お前らがこのままブタ箱ぶち込まれようが、俺には関係ねえ。だがその絆、大事にしるよ。他の人間にはなかなかそんな強い絆は作れねえ。お前らは、一生かかっても作れねえもんを、もう持つてるんだ。それは誇れ」

今度は、齒の食いしばりもなくなつた。筋肉が緩み、呆氣にとられる。彼らは、今まで当たり前すぎて気づいていなかった絆の強さを、しかと感じた。それは、多大なる安心感を与えてくれるものだと、今になつて気付いた。

「お前ら、もう帰つていいぞ。俺昨日からここに赴任してきて、やらなきゃいけないことが山積みなの。お前らの相手なんてしてる暇ないから」

早く帰れと手を振る秋志に、二人はもう何も言えなくなつた。襟首を掴まれて無理に立たされ、背中を手の平で押された。二人はど

ちらともなく歩き出し、署を後にした。

それからしばらくの間、三人は行動を落ち着けた。秋志といった時間はほんの僅か。言われたこともほんの僅か。それでも、何か浸透するものが、三人にはあった。それはじわじわと、しかし確実に三人の心に染み込んできた。

「何だっただあの刑事」

「意味わかんなかったナ」

「ホント」

毎度おなじみとなつている三人のたまり場、丈の車庫で、三人はまた今日も暇をつぶしていた。

「散歩でも行ってみつか？なんか、じつとしてんのは性に合わねー」

「だナ。琉妃香も行くか？」

「そういうの愚問つて言うんだぜー」

「コイツ、難しい言葉覚えやがったナ。俺ら出し抜こーって気力！」

「バーカ。お前らなんてとっくに出し抜いてんだよ」

「チクシヨ、あの可愛い琉妃香はどこ行つたんだ？」

「どのあたしだよ！っつーか今は可愛くねーってか！」

「冗談だよ」

「知つてんよ」

三人はとりあえず人気のない道を歩いた。散歩をするなら静かな方がいい。そのまま公園に来ると、駐車場に目を引く車が一台あった。真つ白なFCだ。

「おーFCじゃん。俺免許取つたらあれ乗りてーんだよ」

「FCかっこいいよナ。俺FD派だけド」

「えー、そこはやっぱGTRじゃない？」

そんな話をしていたら、そのFCから人が降りてきた。三人はその顔に見覚えがあった。この間警察署で見た、秋志だ。

秋志は車を降りると、走って公園の中へと入って行った。三人は顔を見合わせて頷き合い、秋志の後を追った。

三人が秋志を見つけた時、彼は一人の男と対峙していた。すると、三人の皮膚を何かがびりびりと刺激した。あれは普通の人間ではない。何か、言葉では言い知れぬものが感じ取れる。それは三人ともが感じているようで、誰ともなく目を合わせてその異様な存在を確認し合った。

「お前かあ、近頃盗み働いてるって奴は。話し合う気は……ねーな。来いよ、デカブツ」

秋志が挑発的に言うのと、対峙している男が秋志に殴り掛かった。瞬間、秋志に倒される。彼は、腕を振りぬいたのかもわからないスピードで、その男を倒してしまった。

「終了」

なんてことのない風に言って、手に巻いた包帯のようなものをくると手から外し、それを小さく丸める。その光景に黙っていられなくなった三人は、そこから飛び出した。

「テメー、どういうことだ！」

「俺らに説教しといて自分は勝手がヨ！」

「結局あたしら騙してたわけかよ！」

飛び出してきた三人に秋志は多少の驚きを顔に出して、苦笑した。「おうおう、そろそろとサーカスカ、オメーらは。ちっと静かにしろ。こいつを引き渡すまで待ってる」

「引き渡す……?」

春一達が何事かと目を向けていると、秋志はどこかへと電話をして、所在を告げた。短く二、三言述べて切る。

その後でその男の後ろ手を縛りつけてそこから少し離れた、自動販売機とベンチがある場所に移動した。

「ホレ」



「！」

秋志がアイスの販売機でストロベリーのアイスを買って琉妃香に投げる。その後でクリームソーダを丈に、抹茶を春一に投げて超越した。

「何のつもりだテメー！餌付けしようって気力！」

「餌付けって！お前から本当にサーカス？」

食って掛かる丈に、秋志は腹を抱えて笑った。春一が我慢ならぬ風に、アイスを秋志に投げつける。全力投球をしたのに、それはいとも簡単に取られた。

「食い物は粗末にするもんじゃねーぜ」

「そんなもんいらねー。それより、説明しろ！」

春一が怒鳴ると、秋志はふっと笑ってベンチに座った。

「座れよ。一から説明してやる。尤も、信じるかどうかはオメーら次第」

そこで秋志は、妖怪について語り始めた。そして自分がつけていた呪符のこと、枢要院のこと。自分が彼らに頼まれて妖万屋をしていることも。

秋志は三人が妖怪と関われる力があることに気付いていた。勘のいい人間ならばわかるのだが、秋志にはそれがとても強く感じられた。まるで、秋志に「気付け」と言わんばかりの強さだった。

そのサングラスの奥の瞳は、三人の反応を楽しむかのように常に愉快そうだった。が、それは三人に見えるはずもなかった。

「つつーわけよ。わかった？」

三人は眉間に皺が寄ったまま、それを解けないでいた。いつもの睨み顔とは違う、ただ純粹な疑問が募っていた。

「信じてねーな！俺のことを痛い兄ちゃんだと思ってるだろ！だが実はそうじゃないんだな。ちよつと来いよ」

結局三人分のアイスを平らげた秋志が、先程の妖怪の元へと歩み寄った。

「強い妖怪を相手にする時は呪符がないと相手にできねーんだ。つか、この呪符自体が高等技術者用だから並の人間がつけたら電流走ったみたいに痺れて、結構痛いぜ？んでもって……」

秋志はいきなり、せつかくしぱりつけた妖怪の縄をほどいた。これで妖怪が目覚ませば、すぐに動くことができってしまう。

「この呪符がないと、こういう妖怪には太刀打ちできないんだな、これが。お前ら、ちよいやってみるよ。素手のこいつと、お前ら三人、絶対勝負になんねーから」

その言葉に三人の表情が一変する。そんな挑発的に物を言われて黙っていられるほど血の気が少ないわけではない。

「上等だ、やってやんヨ！」

「そんな奴、俺らいくらでも沈めてきてんぞ！」

「後悔すんなよ！」

「……やってみる」

秋志が妖怪の頬を叩いて起こす。妖怪は驚いて目を開け、すぐ臨戦態勢になった。

「いや、相手は俺じゃなくてさ、あっち。俺とやりたきゃ、あのガキ共片付けてからな」

すまし顔で言う秋志に、妖怪はにたりと不敵に笑った。

「どうなっても、知らないぞ？」

「いいよ」

その秋志の申し出に了承した妖怪は、春一と丈に向かって突進してきた。速い。

「その程度、普通だぜ！」

春一が近くにあった木を蹴って大きくジャンプする。そのまま妖怪の頭付近に跳ぶと、顔面に膝蹴りを食らわせた。

「どうだ！」

が、当の妖怪は何のダメージもなく、そこに立っている。

「んだと！？」

「こつちだ！」

今度は丈が渾身の力で振りぬいた拳を妖怪の顔面に食らわせる。手ごたえはあった。だが、ノーダメージなのだ。

「ナツ！？」

力を入れすぎてから回ってしまった丈に、容赦なく妖怪の剛腕から突き出された拳が突き刺さる。

「ガツ！」

殴り飛ばされた丈は、あまりのダメージに起き上がることができなくなってしまう。自分が一撃で伸されるなど、今までになかった。

「ジョー！」

琉妃香がすぐに向かって介抱する。春一は焦点を妖怪に変え、鋭く睨みつけた。

「テメー！ジョーに何しやがる！」

助走をつけて飛び回し蹴りを叩き込もうと跳んだところを、丈と同じく殴り飛ばされる。無様に倒れて動けない。

妖怪は、今度は琉妃香に狙いをつけた。

「テメエ……琉妃香に手え出したらタダじゃおかねえ……！」

「マジ無事じゃ済まされねーぜ……？」

何とか足に力を入れて立ちあがると、妖怪はまたしても二人の的を絞った。

「あいつら、あれ立つかよ……」

ひょうきんに驚いた様子をした秋志は、自分の持っている呪符を一つずつ、春一と丈に投げて渡した。

「それ使ってみるよ！」

二人は秋志がやっていたように、手にそれを巻きつけた。

「あれ……?」

ここで秋志の予想と違うことが起きた。あの呪符は高等技術者用である。並の人間がつけたらどうなるかは説明済みである。しかし、その拒絶反応が起きないのだ。呪符が、春一と丈を高等技術者として認めてしまったのだ。

「チクシヨー、今から反撃行くぜ！」

「オオヨ！」

春一と丈は顔を乱暴に拭ってその妖怪に立ち向かった。春一の拳が空を切り、妖怪が避けた先に丈の拳が待ち受けている。

「オラア！」

先程と同じように殴ると、今度は妖怪が怯んだ。間違いなくさつきとは違い、効いている。

「このっ！」

上体が崩れたところに春一のハイキックが飛んでくる。蹴られた妖怪はそのまま倒れそうになる。

「へえ、効いてんじゃん？」

「よくわかんねーけど、スゲエじゃん?……まあ、俺らにしてみりゃそれはどーでもいいのヨ」

「そうだ。テメーさつき琉妃香狙ったよな……?」

「それだけは許すわけにはいかねーんだ！」

二人の蹴りと拳が妖怪の顔面を捉え、あえなく妖怪は再び撃沈してしまった。

「ハル！ジヨー！大丈夫？」

「お前何急に乙女チックになつてんヨ？」

「今までに大丈夫じゃなかったことあつたっけ？」

「オメーら……強がるんじゃないよ！」

琉妃香が二人の頬を叩くと、二人の顔が苦痛に歪んだ。妖怪に殴られたダメージは計り知れない。

「おうおう、スゲーことやっちゃまったな、オメーら……」

驚きで物も言えなくなつてしまった秋志を余所目に、三人は何だかんだで笑い合っていた。

その後、春一達はずっと秋志についていた。最初の出会いからは考えられないほど、彼らは秋志に懐き、そして秋志から何かを学び取ろうとしていた。いつしか「トランプ」という名前もあまり聞かれなくなっていた。

「お前らさー、学校行けよ。刑事と不登校児が一緒にいたら結構問題だろうが」

例の公園でアイスを食べながら、秋志が困ったように言う。三人はてんで意に介していない。

「知らねーし」

「別にどーでもいいヨ」

「秋志ー、ジュース飲みたい」

それぞれ好きなことを言う三人に、秋志は笑顔に怒りマークを付けた表情で、飲みかけの缶コーヒーの缶を強く握りしめた。

その時、秋志の携帯電話が鳴った。

「何だ秋志、サボりがばれたか」

「給料泥棒」

「税金泥棒」

「うるせー！今日は非番だ！」

言い返してから通話ボタンを押す。

「もしもし？……ああ、いいよ。おう、待ってる。んじゃ」

短い電話を切ると、三人の顔がにやけていることに、秋志は気が付いた。

「秋志、女か？」

「隅に置けねーじゃねーノ」

「スケベ」

「待て！どうしてわかった！？つか琉妃香、スケベってなんだ！」  
顔を真っ赤にしながら慌てふためく秋志に、三人はいよいよ面白  
そうだ。にやにやしなから秋志を見る。

「何、今から来んの？」

「会わせるヨ」

「物好きな女の人見てみたい」

「誰がオメーらなんかに会わせるか！散れ散れ！」

冗談じゃないという風に手を振って三人を邪魔者扱いする秋志だ  
つたが、三人は動く素振りすら見せない。

「ちーれー」

春一を無理やり立たせようと襟首を掴む秋志だったが、その手は  
乱暴に払いのけられた。

「何、そんなに会わせたくないわけ？相手キャバ嬢とか？」

「ランキング何位？」

「どこの店？」

「キャバ嬢じゃねえよ！普通の女だって！」

「じゃあ会わせるよ」

「そーだそーダ」

「寂しいことでもあんのか？」

「そーゆー問題じゃねえっ！ああ、俺段々藤さんの立ち位置になっ  
てきてんな……」

そんな会話を繰り返していたら、駐車場に一台の車が停まるのが  
見えた。NSXだ。春一達がそのNSXに注目していると、その車  
から一人の女性が降りてきた。すらつとした体型で背は高く、NS  
Xから降りていなければモデルと見間違うほどだ。

「すげえ、あのNSXねーちゃんが運転してたのかよ」

「カッケエー」

「あの人すごい美人」

「来ちまった……」

「え？」

三人の声が重なる。秋志の一言に、三人が一斉に彼を見る。秋志は両手で頭を抱え、項垂れていた。

「おい、秋志、まさか……」

「あのネーチャン……」

「彼女お!？」

琉妃香が言つと、秋志の顔が今まで以上にぼっと赤くなった。もう隠しきれない。

「秋志、ごめん、待たせちゃっ……て?」

やってきた由良が見たものは、項垂れる秋志と、アイスの棒を手にした三人の中学生だった。



その後何回か会っている内に、由良と春一達はすっかり仲良くなった。由良の経営する中古車ショップに行って好きなだけ車を見に行ったり、秋志とのデートを邪魔したりと、最早友達レベルだ。由良も元々面倒見がいい性格だけあって、すぐに三人のお姉さんの立ち位置に立った。

「秋志、キスしないの？」

「しちやえヨ」

「キース、キース」

「オメエらぶっ飛ばすぞ！」

いつものように公園でこんなやり取りを十数回重ねていると、秋志の携帯電話が鳴動した。画面に映る発信先を見て、秋志の表情が硬くなる。

「もしもし？……了解。すぐに向かう」

それだけ言うと、秋志は携帯電話を黒い革ジャンパーの胸ポケットにしまった。そして立ち上がる。

「枢要院からの依頼だ。今回はかなり強い妖怪らしいから、お前らついてくるんじゃないぞ」

すると、三人はすつくと立ち上がった。

「そんなん、俺らが聞くタマかよ？」

「秋志、俺らのことわかってねーナ」

「ついていくに決まってるじゃん」

「でも今回は本当に強い妖怪で……！お前らを危険な目に遭わせられるかよ」

「強えんなら、秋志一人よりか俺らいた方がいいじゃん？」

「四人集まったら、強えぜ？」

「百人力かける四だからね」

「くっ！くっ！たく、勝手にしろ！」

結局秋志は根負けして、三人の申し出を了承した。由良も含め、五人で現場へと向かった。

現場は、数珠市の山のひとつだった。急勾配で知られるこの山は、所々崖になっていて、事故が多いことでも有名だった。秋志と由良は頂上に車を停めた。

「！」

三人は、車を降りた瞬間、違和感に気付いた。びりびりと、強く禍々しい狂気にも似た妖気が、三人の神経を刺激した。体が芯から震え、内臓がすくみ上る。彼らも何度か妖怪と対峙してきたが、こんなに強い妖気は初めてだ。

「こつちだ」

秋志が森の中へと入っていく。四人もそれについていく。皮膚を刺す妖気が、どんどん強く、濃くなっていく。

「いた」

まるで樵のように、木の上に座っている男がいた。その姿かたちは、まさに鬼。毒々しい緑色をした体は巨大で、頭からは角が生える。目はぎよろついでいて、獲物を求めている。

「おうおう、お前か、人を殺した妖怪つてのは」

秋志が近づきながら話しかける。鬼はぎろりとこちらをねめついで、木株から腰を浮かした。

「誰だあ、お前？」

まるで地獄の底から這いつくばって出てきたような、そんな声だった。

「俺は秋志。妖万屋をしている。今回枢要院から依頼を受けてやってきた。お前を捕まえる」

「やれるかなあ？」

「やってやるぞ」

にやりと不敵に笑った秋志に、鬼も楽しそうに顔を歪めた。

その戦いは、壮絶なものになった。鬼が腕を薙ぐだけで、春一達の所まで風圧が襲ってきた。秋志が拳を避けた時、鬼の拳が木に当たった。すると、その木はミシミシと音を立ててゆっくりと倒れた。「マジですか」

言う割に、秋志の態度は飄々としたままだ。

春一達は、その場から動けなかった。秋志の助太刀をしようとしても、足が竦んで動けない。目の前で繰り広げられる戦いに、息を呑むことすらできない。

「おらっ！」

秋志のボディブローが当たっても、鬼は痛がる素振りすら見せない。逆にハイキックを仕掛ける。……が、秋志の腕がそれを防ぐ。集中力を最大限まで高めなければ追えないほどの動きの応酬。見ているだけの春一達にも汗が流れ始める。秋志は、既に荒い呼吸を整えようと必死だ。

「そろそろ決めるぞ……この野郎」

秋志がぐつと足に力を入れ、下から掬い上げるように拳を突き上げた。それは鬼の顎を砕き、鬼を倒した。

「ぐうっ……」

その隙を見逃さず、秋志はここぞとばかりに畳み掛けた。鬼の腹に更なる拳を打ち込み、ハイキックを叩き込む。

「ちいっ……！」

鬼は舌打ちしながら、倒れそうになる体を持ちこたえた。

「まだだぜ」

秋志は更なる攻勢をかけた。次々に打撃が鬼の体へと吸い込まれていく。

「くそっつ！こうなれば……」

鬼は自分が秋志に勝てないことを察した。そして、このまま引くことはできないと、ある苦肉の策を取った。

「ん？」

鬼は、急に秋志に急接近した。秋志を抱え込むようにして、密着する。そしてそのまま、奥にある崖へと歩を進める。

「テメエ！俺を道連れにしようって気が！」

鬼のしようとすることに気付いた秋志が、必死にもがく。しかし、密着しているせいで力が入らない。身をよじらせることはできても、引きはがすことはできない。

ずるずると、鬼は着実に一步步崖へと進んでいる。秋志はなされるがままになってしまっている。

「ちくしょおっ！」

「へ、終わりだ」

崖の先まで来て、鬼は体の重心をゆっくりと傾けた。

「ちっ……しょうがねえ」

秋志はそうつぶやいて、もがくのをやめた。

「ハル、ジョー、琉妃香！」

秋志が三人に向かって声を上げた。三人ははっと我に返り、続く言葉を待った。

「俺も昔はオメーらみたいにヤンチャだよ、色んな悪さしてきたよ。けどな、それでもいい！何したっていい！それはお前らの自由だ。ただ、何するにしてもこれだけは忘れんな。自分の信条に従え！それだけは、絶対忘れんじゃねえぞ！」

自分の信条に従え、それは、三人の心に強く響いた。自分の信条が何なのか、今の三人にはっきりしたものはない。しかし、それでも、これだけは忘れてはならないと思えた。そう思わせる強さが、秋志からは感じられた。

「由良、悪いな。今までありがとう」

秋志は由良にそうつぶやくと、最後に声を張り上げた。

「妖の悪は俺が止める！それが俺の、信条だ！」

秋志は鬼と共に、崖下へと転落した。

「秋志っ！」

春一達は崖へと身を乗り出した。しかし、底は暗く、どこが底部なのかもわからない。崖の下から吹く風が、四人の髪を揺らす。どこか現実感のない空気だった。

由良が悲鳴のような叫びと共に涙を流し、膝から崩れ落ちた。三人はやつと事の重大さに気づき、それに気づくと同時に足から力が抜けた。

秋志の葬儀は、しめやかに行われた。

その後、崖の下から秋志の遺体と妖怪が発見された。妖怪はまだ息があつたものの、全身の骨は粉々に砕けており、回復しても歩くことは困難だろうということだった。

妖怪は枢要院が逮捕し、処理したため、表向きには秋志の不注意による転落事故死となっていた。

「由良さん……」

葬儀が終わった後、春一が由良に話しかけた。由良は涙の痕が付いた顔を春一に向けた。無理に笑おうとしているその表情が、春一の胸を締め付ける。

「由良さん、すみませんでした」

春一は悲痛な思いで、頭を下げた。由良の反応を見るのが怖くて、顔を上げられない。

「俺が、もう少し秋志の力になれたら……。本当、詫びの言葉もありません」

「ハル坊」

「はい」

ゆっくりと顔を上げると、由良が怒つたような表情で立っていた。

そして、両手で春一の顔をバチンと挟み込む。

「イツテエ……」

「ハル坊、怒るよ？」

「もう怒ってると思います……」

「あのね、あんた、秋志を侮辱する気？秋志は妖怪に全てを捧げたの。それを無下にする気？秋志は、きつところなることがわかってたんだと思うの」

「え？」

春一から手を離して、由良は笑った。無理な笑顔ではなく、思わず笑ってしまったような顔だ。

「秋志は、きつとあの妖怪が生き残ることがわかってた。だから、あの妖怪が生きて更生できると信じて、道連れにされたんだと思う。そうでなきゃ、あの秋志があんなに素直になると思えない」

「そっか……」

そう言われて、春一も笑った。確かに、秋志ならばそうしそうだ。

「そう、だね。ごめん、由良さん」

「謝んなくていいの。ハル坊、ドライブ行かない？」

「お願いします」

由良は秋志を送り出すように、アクセルを踏んだ。



「懐かしいね」

「本当だね。あの後、ハル坊が妖万屋を継ぐって言うてくれた時は嬉しかったな。最初は罪悪感でそうしてるのかと思っただけど……あの言葉を聞いて、本気だっと思ったよ」

「『俺にできることはする。それが俺の、信条だ』？」

「うん。ちよつと惚れそうになつたよ」

「惚れてみる？」

意地悪く笑う春一に、由良は春一の頭をバシツと叩いた。

「オウ、由良さん口説いてんじゃねえぞ、小僧」

春一と由良が談笑をしていると、強面の男が近づいてきた。黒く汚れたツナギを着て、短い金髪は根元が黒くなっている。がっちりとした体つきは、彼の力強さを感じさせた。

「あ、タケさん。相変わらず由良さん口説いてんの？」

「うっせえ。テメエ車見に来たんだろ。由良さんばっか見てんじゃねえよ」

彼はここの整備士で、たけふみ 武史という。入社以来ずっと由良に片思いを続けている一途な男だが、この近辺の走り屋をまとめるチーム、「FIRE RED」のリーダーでもあった。由良も満更ではないのだが、秋志のことがあるだけに踏み切れないと言った所だ。武史は今日もアタックを続けている。

「さっさと車選んで帰りやがれ」

「ねえ、タケさん、ちよつとこつち来て」

「あ？テメエ俺にツラ貸せってか？」

「いいからいいから。ね」

武史を倉庫の裏に連れてきた春一は、武史を前に真面目な顔をし

た。

「タケさん、本当に由良さんのこと好き？」

「テメエ殴られてえのか？当たり前なこと聞いてんじゃねえ」  
即答だった。間髪いれないとはまさにこのことだ。

「由良さんのこと幸せにできる？」

「してみせる」

その言葉を聞いて、春一はにつこりと笑った。そして頷く。

「良かった」

春一は表に戻り、再びFCを眺めた。

「タケちゃんと何話してたの？」

「秘密。男の話ってやつ」

「ずるいなあ」

「ねえ、由良さん」

「ん？」

「このFCちょうだい」

「えっ!？」

その言葉には、由良だけでなく武士も驚いていた。秋志が乗り続け、今も由良がチューニングを欠かさないこのFCを、春一がほしと言っている。

「俺、さ……今回のことで、かなりキレてんだ。俺の大事な家族同然の奴を、手にかけて妖怪がいる。……けどね、由良さん。俺、そいつを許さない気はないんだ。秋志みたいに、妖怪を信じるよ」

春一が見せた笑顔に、由良ははっとした。その笑顔に、秋志の面影を見たからだ。穏やかな微笑みは、生前の彼を彷彿とさせた。

「……うん。そうだね。ハル坊になら、このFC、乗りこなせると思う」

「オウ、小僧。妖怪だか何だか知らねえが、このFCで生温い走りしやがったら承知しねえぞ」

春一は二人の言葉に笑顔で頷いて、エンジンをかけた。体と心を揺らす音が、震える。

(この音……懐かしい。秋志の音だ)

春一はしばしの間四年前の思い出に浸り、そして車を発進させた。

それから三日後、夏輝が退院した。骨折は自宅療養ということになった。

「ハル、あの車は何ですか？」

春一が帰ってきた夏輝にコーヒーを差し出すと、彼は開口一番に言った。

「いいだろ。買った買った」

「買った買った……？」

夏輝の顔の筋肉がひくついたまま固まる。

「うん。これからウチの車、あれね」

何でもない風にコーヒーをすすする春一に、夏輝はいつものようにため息を吐き出して、骨折の痛み顔に顔を歪めた。

「俺これから出かけてくるから、お前は家で療養してな。じゃーね

」

「ハル、まさか例の車と勝負を……？ハル！」

車のキーを持って外に出ようとする春一に、夏輝は骨が軋むのも構わず叫んだ。

「だーいじょーぶ。俺は、妖万屋だ」

そつと微笑んだ春一に、夏輝はそれ以上何も言えず、彼の背中を見送った。

春一が事故のあった山を走っていると、前の待避所にNSXが停まっていた。車の外には由良と武史が立っている。春一も車を停めて外に出る。

「ハル坊、やるの？」

「腹あ括ってんだろうな」

「うん。……由良さん、そのステッカー」

NSXのテールには、一枚のステッカーが貼られていた。黒い地に黄色い文字で「SUPERSONIC」と書かれている。

スーパーソニックとは秋志が作ったチームで、由良を含め十人ほどのメンバーがいた。車種を問わず、ただ楽しく走ろうというチームに集まったメンバーは、全員秋志の人柄に惚れこみ、ついてきた。「これは、まだ剥がせないよ」

その言葉に、武史が複雑な表情を浮かべる。

「由良さん、俺、行ってくるよ。見てて、俺の走り」

「うん」

春一は再びFCへと乗り込んでエンジンをかけた。由良が運転するNSXは、山での走りが一望できる頂上へと先に出発した。

後に残った春一が、周囲が完全な夜になったのを確認して車を発進させる。少し走ると、闇に浮かぶ赤いテールランプと白いボディが見えた。件のシルビアだ。

「テメエがこの野郎。よくも夏に怪我させやがったな。落とし前はきっちりつけさせてもらうぜ！」

春一はアクセルを踏み込んだ。

シルビアとの勝負に乗った春一は、ワインディングが多い山道を疾走していた。シルビアとの間を一定に保ちながら、ドリフトを仕掛け、相手を追う。

「んだあ？シルビアの妖怪。ドラテク（運転技術）はそこまで高くなえじゃねーの」

春一が挑発代わりにシルビアのテールにFCのノーズを当てる。シルビアはそれに対抗するようにスピードを上げる。

由良と武史は、山の頂上からそのバトルを見ていた。

「あの小僧、なかなかやるじゃねーか」

「違う……」

「ん？」

由良が、ポツリとつぶやく。その表情は、信じられないといった様子だ。

（違う……何で？今までずっとチューニングを続けてきた。ずっと、秋志仕様にしてきたはずなのに……なんで、秋志とは違う走りをするの？あのFCで走ってるのに、走りが秋志と重ならないよ……）

春一は全神経を集中させて、前のシルビアを追っていた。すると、異変が生じた。前のシルビアが、段々と黒く染まっていくのだ。すぐに目の前は漆黒に染まった。

（来たな！）

春一はその事態にも慌てず、頭の中で自分が今走っているコースを思い出した。

（ここだ！）

ギアをセカンドまで落とし、減速する。そしてドリフト。FCはガードレールすれすれのライン取で、カーブを曲がった。

その後も春一は記憶を頼りに走り続けた。この山ならば初心者時代に走りこんだ。どのタイミングでギアをシフトすればいいか、どのラインを取れば最短で曲がれるか、全ては頭と体に叩き込んである。

(そろそろだ……)

春一が睨んだ通り、黒い霧が段々と晴れはじめ、前を走るシルビアが再び姿を現した。黒い霧は、シルビアの中へと集束していく。

(攻めるなら、ここ！)

このコーナーを勝負所と決めた春一は、カーブ手前のストレートでスピードを上げた。シルビアも抜かれまいとスピードを上げる。そしてそれが、勝敗を決した。

スピードを上げすぎたシルビアが、カーブを曲がりきれず、ハンドル操作を誤ってガードレールに激突した。春一のFCは、それを避けてターンし、そこに停車した。

「オイ、その妖怪コンビ」

春一は車から降りてシルビアに詰め寄った。車内には二匹の妖怪がいて、事故のダメージから抜けきれずにいた。春一はガードレールと接していない助手席側のドアをガンと蹴ってエクボを作ると、中から妖怪を引っ張り出した。

引きずり出された妖怪達は、道路に転がされた。逃げ出すことができないように、呪符で妖怪の腕を縛る。

「テメエら、よくもこんな事件起こしやがったな。拳句の果てに、俺の助手まで傷つけやがって……。本当なら半殺しにしてやりたいところだが……。もういい。お前らは枢要院に引き渡す」

「何故……。何もしない？」

運転をしていた方の妖怪が、痛みに呻きながらも春一に問うた。

「お前らを、信じてるからだよ。もう二度とこんなことはしないって」

「何で、信じられる？」

「俺が妖怪を信じてるからだよ」

言ったあとで春一は、ニヤリと笑った。その笑顔からは、何か禍々しいものを感じられる。妖怪は背筋に冷や汗が流れるのを感じた。「けどまあ……何もなしってのは甘すぎるよな。これは受け取っつけ」

そして春一はギュッと拳を握った。妖怪が嫌な予感を感じる時には既に、春一の拳が眼前に迫っていた。



「ハル坊、お疲れ」

「由良さん、タケさん」

勝負を見届けた二人が、山を下って春一の元へとやってきた。由良の顔は少し悲しげだった。それに気づいた春一が、淋しそうに微笑む。

「このFC……もう、秋志のものじゃないんだね」

FCのボンネットをその細い指で撫でながら、由良は言った。まるで、今生の別れのようにFCを撫でる。

「FCも言ってるのかな。『俺の相棒は春一だ』って。さっきね、見てて思ったの。……秋志はもういない。秋志が走らせたFCはもうない。私が愛した秋志は……死んじゃったんだあって」

一筋の涙が、由良の頬を伝う。しずくが、FCに落ちた。

「でも由良さんは一人じゃない」

由良が顔を上げると、優しく微笑む春一がいた。そして、ちらりと武史を見る。

「その涙を拭ってくれる人が、由良さんにはいるじゃん」

それを聞いて、由良と武史の顔が火を噴くように赤くなる。武史はあたふたと落ち着かずにはいたが、やがて由良の前に立った。人差し指でそつと由良の涙をぬぐう。

「もう、泣くなよ。由良には、俺がいる」

武史の口から紡がれた言葉に、由良は頷いた。

それを見届けた春一が、NSXの後ろに回り込んで、ステッカーをべりつと剥がした。

「もうここに貼るステッカーは『SUPERSONIC』じゃないよね？これからは、『FIRE RED』だ」

「そう……だね。でも、せっかく秋志が作ったチームがなくなるのはやっぱりさみしいね」

「スーパーソニックは、失くさないよ」

「え？」

春一は由良にニコツと笑って、ポケットからあるものを取り出した。それは、今まで由良がNSXにつけていたものより少しデザインが変わったスーパーソニックのステッカーだった。

「俺もチームがなくなるのは悲しい。だから、俺が引き継ぐ。これからはドライビングチームとして、俺が引っ張るよ」

「ハル……」

「由良」

剥がしたステッカーを春一から受け取った武史が、それを由良に渡した。そして、胸ポケットからライターを取り出して、ふたを開けた。

「秋志がリーダーのスーパーソニックは幕引きだ。最後のステッカーは、お前が秋志の元に送ってやれ」

「武史……」

由良は武史からライターを受け取り、ステッカーの端に火をつけた。メラメラとゆっくり燃えたステッカーは、やがて灰になって風に運ばれた。

(バイバイ、秋志。ありがとう。忘れないから)

心で秋志に別れを告げた由良は、NSXのキーを武史に渡した。

「今日は送ってくれるんでしょ？」

「勿論」

武史は力強く頷いて、由良をエスコートした。

「調子どーよ？」

「ハル、お帰りなさい。調子はそれなりですね」

春一が家に帰ると、夏輝がソファで読書をしていた。

「その顔は、解決したんですね？」

「まあね。その話をする前に、メシにしよう」

「すみません、これからしばらくはレトルト生活になってしまいます」

「あのさあ、お前、俺のことなんだと思ってるわけ？料理くらいできるっつての」

「……本当ですか？」

「その疑り深い上に信用していない目を今すぐやめろ」

春一は夏輝の額にデコピンをして、キッチンに立った。フライパンを火にかけ、卵を溶きほぐす。そこに牛乳を少しだけ加え、火にかける。小気味いい音と共に固くなっていく卵を器用に動かし、オムレツをさっと作ってしまった。真ん中を割ると、中から半熟の卵がとろけ出た。

「すみません。ハルのことを見くびっていました」

「素直でよろしい。だが感心はなし」

べえと舌を出した春一は、さつさと二人分の夕食を作ってしまった。テーブルクロスを敷いて一輪花でも置いておけばレストランのようだ。見た目にもおいしい。

「それで、妖怪はどうなりました？」

「食事も終わり、コーヒーを飲んでいる時に、夏輝が春一に聞いた。「一発お見舞いしといてやったよ。相手は、コンビだった」

「コンビ?」

「ああ。一人が運転を担当し、もう一人は霧化ができるタイプの妖怪だ。つまり、シルビアは消えてなんかいなかった。黒い霧に変化した妖怪に、姿を隠されていただけだ。だから、本当はずっと前を走っていた。でもまあ、はた目には消えたとは錯覚するわけだ。けど、霧化できる時間は限られている。それまで辛抱強く待ったら、霧も晴れて、普通に勝負ができた。元々技術自体はそんなにうまくない奴だったから、勝つのはそう難しくなかった」

「そうですか……」

簡単に言つてのけるが、実はすごいことだ。それは事故をしている夏輝自身がよくわかっている。

「これで同じ事件はもう起きないだろう。めでたしめでたし」

春一は残りのコーヒートをグイツと飲み干して、カップをシンクへと持って行った。

「洗い上げは後でやっつくよ。風呂入ってくる」

「はい」

手を上げて部屋を出ていく春一に、夏輝は心の中で密かに敬服した。

今日、夏輝は憂鬱だった。

せっかく事故で負った傷も完治し、元気になったというのに。ついさっきまではよかったのだ。ステツレ千草が勝っていた時までには、しかし、先程になって相手のアーレック姉崎が逆転ゴールを決め、試合終了のホイッスルが鳴った時、夏輝は先のことを思っただけで嘆息した。

そう、サッカーの話だ。

ここ数珠市の隣に位置する千草市。その千草市には、Jリーグのチーム「ステツレ千草」がある。J1リーグの中でも強豪の名をほしいままにしている名門チームで、今季は二年ぶりの優勝がかかっている。

そんなステツレ千草のサポーターであるのが、春一だ。地元とスポーツをこよなく愛する彼にとって、ステツレ千草を応援するのは当たり前だった。

しかし、彼には困った一面がある。自分贔屓のチームが負けるとひどく不機嫌になるのだ。大事な試合に負けた時には、部屋から引きずり出すのも一苦勞である。

しかも、今回負けたアーレック姉崎はリーグの中でも最下位のチーム。J2降格がほぼ決定している。そのチームに優勝争いをして、いるステツレが負けたということは、春一の不機嫌さもひとしおと、言うわけだ。

「？」

春一の機嫌をどうやって直そうかと思案していると、玄関から鍵を開ける音がした。春一はいくら劣勢でも試合は最後まで観戦する人だから、彼ではないとすると誰だろう。

夏輝は若干身を固くしながら、ダイニングのドアを開けた。ダイニングと玄関は一本の直線の廊下で結ばれているため、入ってきた人間がすぐに見えた。

「なっ!?!」

夏輝は、驚きのあまり腰が抜けるかと思った。

春一の不機嫌さと言ったら、この世にある言葉の全てを出し尽くしても表せられないほどだ。今日の試合は、ACLに出場するためにも、そして何より優勝するためにも絶対勝たなければならぬゲームだった。相手は最下位だし、こちらのホーム。手堅く勝ち点3を取る予定だった。

前半はステツレ優勢で折り返した。後半になると、ステツレの花形ストライカーで、得点王を狙っている選手が素晴らしいミドルシュートを決め、ステツレサポーターは一気に活気づいた。このまま二点目もそう遠くないと思われたが、最下位には最下位なりの意地があった。

後半も時間が少なくなってきたところで、相手のFWがコーナーキックからのヘディングシュートを決めた。それで調子が出てきたアーレック姉崎は、後半ラストタイムに追加点を決めた。そして試合終了のホイッスル。勝負とは時に奇跡を生み、特に残酷なものである。

春一はスタジアムから家に着くまで、苛々しっ放しだった。そのせいで車の運転も荒くなる。いつもはあまりしないのだが、家の駐車場に停める時、一回フカした。

家に入り、いつものようにダイニングに行く。首に巻いていたタオルをソファに投げつけ、ユニフォームも脱いでその辺へ投げ捨てる。

「ハル、お帰りなさい」

夏輝の言葉にも反応をせず、そのまま自分の部屋に戻ろうとした時。

春一は、殴り飛ばされた。

「イッテエ……。夏！どういっつもり……。だ？」

夏輝に文句を言おうかと顔を上げた春一の表情が見る見るうちに混乱で染まる。

「ひどいですね、ハル。父親の顔を忘れるなんて」

春一は殴られた痛みも忘れ、自分を見下ろしている父親を見た。

「な……。何で、親父！？」

「全く、イラつくのは勝手ですが、それを他人に当たり散らすなんて感心できませんねえ。ハル、直すようにしてください」

「アメリカの大学にいるはずじゃあ……」

「学会が日本であるので、帰ってきたんですよ。尤も、明日の朝には発ちますけどね」

何も言えない春一に、父親はニコリとほほ笑んだ。



夏輝が物音を探るためにダイニングのドアを開けた瞬間、彼は信じられないものを目にした。自分と同じ顔が、そこにあったからだ。体格、顔、髪型、雰囲気、全てが自分と瓜二つ。まるで鏡を見ているような気分に陥った。今家の中に入ってきた彼は、まさに自分そのままだった。夏輝の頭にドツベルゲンガーという単語が浮かんで消える。

「ああ、こんにちは」

物静かな落ち着いた声は、自分よりも年上を感じる。冷静さを取り戻してみると、彼の顔は自分よりも十歳かそれ以上年上に見える。「こんにちは。え……と」

夏輝が対応に困って立ち尽くしていると、彼はゆっくりとこちらに向かって歩いてきた。上品で皺ひとつなく仕立て上げられたスーツを見事に着こなして、シンプルだがお洒落な柄のネクタイがそれをさらに映えさせている。

「同居人の方ですか？」

「は、はい」

彼は夏輝の前で立ち止まり、問いかけた。眼鏡の奥の眼光は優しく柔和な雰囲気を感じさせる。

「申し遅れました。私、春一の父で龍青と申します。春一がいつもお世話になっております」

龍青は小さく頭を下げた。しかし、そんな行為は夏輝の目には映っていないかった。いや、目には映っていたが、脳がそれを認識しなかった。それほどまでに、衝撃が強い。

（ハルの……父親？ハルに……父親？）

正直、「いたのか」という気持ちだ。彼がちゃんと人から産まれ

た存在で良かった。

そこまで考えて、夏輝は自分の無礼に気が付いた。相手にだけ自己紹介をさせておいて自分は黙るなど、失礼にも程がある。

「こちらこそ申し遅れました。同居人の夏輝と申します。ハルにはいつもお世話になっています」

一通りの自己紹介を終えて、二人は部屋の中に入った。夏輝が龍青にコーヒーを差し出す。

「すみません。自分の家なのにもてなしていただいて」「いえ」

龍青はコーヒーを一口啜り、「おいしいです」と微笑んだ。笑いがどことなく春一に似ている。

「ハルは今不在ですか？」

「ええ。サッカーの試合を見に行っています。先程試合は終わったようですから、少しすれば帰ってくると思います」

「そうですか。ハルは昔からスポーツが好きでしたからね。未だにステッレを応援しているのかな？」

「はい。それはもう、熱烈に」

「変わらないな」

龍青は苦笑交じりに笑った。昔から今のような感じだったらしい。「龍青さんは、何をされているのですか？ハルからは何も聞かないので……」

「やはり、そうですか。私は、今はアメリカの大学で地質学の研究をしています。今回、学会が日本であるので、三年ぶりに帰省を。あなたのことは前に手紙に書いてありました。』一緒に住むことになった奴がいる』と」

「それだけですか……」

春一らしい。しかし、それだけで事情を了承するとは、龍青はやはり春一の父親だ。

「手紙もそれ一通だけですけどね。便りがないのは元気な証拠とはよく言ったものです。こっちも置いてきた身なので、強く言えなく

て」

三年前と言えば、夏輝と春一が出会った時だ。龍青とは入れ違いになったらしい。

「ハルは何かご迷惑をおかけしていませんか？」

「いえ、そんな。寧ろ私が迷惑をかけているくらいです」

そんな話をしていたら、玄関のドアが開く音がした。今度こそ春一だ。

そして、現在に至る。

7 - 4

「聞いてねえぞ」

「言ってますんから」

「さっさと帰りやがれ」

「帰る場所はここなのですが」

「アメリカに帰れつつってんだよ！」

声を荒らげてそれだけ言うと、春一は立ちあがってダイニングから出ていく。自分の部屋のドアをボタンと強く閉めて、拒否をアピールする。

「やれやれ……ハルにも困ったものですね。きちんとしつけなかった私が悪いのですが」

肩を落としてため息をついた龍青に、夏輝もつい情性でため息をついてしまう。

「夏輝さん、何であんな不肖の息子についていくんです？妖怪のことならば、自分でどうにかすることだってできるでしょう」

「妖怪の話を、信じられるんですね」

「ええ。まあ、私は否定はしませんし、ハルがそんなことで嘘を吐くメリットも思い浮かびませんから」

「私の父は、そういうのを根本から否定する人です」

そう、春一と出会ったのは三年前の五月だった。あの日、あの場所。

風薫る五月。春の桜が散り、徐々に緑が顔を出す。芽吹いた植物が目にも心にも安らぎを与える。そんな季節。

夏輝は音楽大学をその前の年に卒業し、現在はある楽団でチェロを弾いていた。中学生の時に始めたチェロだったが、その才能にも

恵まれ、音楽大学に入ることができた。卒業する時に楽団に誘われ、それに乗った。夏輝は時にスランプに悩みながらも、それでも楽しんでチェロを弾いていた。

しかし、そんな彼には悩みがあった。それは、怪奇現象に基づく父親との不仲である。

近頃、夏輝の周りではある怪奇現象が起きていた。

彼が家に帰ると、中から不審な物音が聞こえた。最近、近所では空き巣が多発している。もしものことがあると思い、夏輝は身を固くした。

中に入り、彼は唾然とした。ひっくり返ったような、という表現がぴったりなほど、家の中が荒らされていた。

そして更に、中には人影があった。机の向こう側、窓の近くに黒い人影が見える。

「！」

人影は、夏輝がドアを開けた物音に気付き、ぱつとこちらを見た。夏輝は驚きのあまり何もできずにただ固まっている。すると、彼は信じられないものを目にした。人影が、すーっと消えていくのだ。

消失。そんな言葉がしっくりくる。夏輝は、目を丸くしてその光景を見た後、しばらくそこから動けなかった。

夏輝は、その話を自身の父親に話した。あれは人知を超えた事象だと。あんなことができるのは妖怪くらいしかない。しかし父は、その話を一笑に付した。

「何かの見間違いだ。きつと疲れていたんだ。妖怪なんているはずない」

そう言つて、まるで相手にしなかった。しかし、夏輝はあの時見たものがまやかしかだとはとても思えなかった。確かに自分の見間違いと言つてしまえばそれまでかもしれない。だが、どうしてもそう思えなかった。

その理由は、彼があの時感じた違和感にある。あそこに存在した異形の者は、普通の人間とは異なつた「気」を発していた。それが、夏輝には感じられた。

「父さん、あれは人間の仕業じゃない。僕にはわかるんだ」

「馬鹿なことを言うな。頭がおかしくなつたのか？」

「でも……」

「いいか。あれはただの空き巣。この件は警察に任せておけばいい。お前は何も口を出すな」

それ以来、夏輝と彼の父親の間には、微妙な空気が流れ続けた。父は息子のことをいよいよ疑いはじめ、息子は理解してもらえないもどかしさから父を信じられなくなった。

夏輝には、お気に入りの場所があつた。市内を流れる大きな川の、河川敷。車で川のすぐそばまで下りて、車のトランクを開け、そこに腰掛けながらチェロを弾く。それが、彼の楽しみだった。

今弾いているのはエドワード・エルガー作曲、チェロ協奏曲。戦

後の荒廃した世界を謳った重く悲しいメロディーは、今の夏輝の心にはぴったりだった。

曲を第二楽章まで弾いた時、夏輝はふと視線を感じて、閉じていた目を開いた。すると、土手の上に誰かいて、こちらを見ている。自転車に跨った少年で、明るい茶髪が目立つ。まだ中学か高校かわからないくらいの年なのに、髪を染めているなんて。

自転車に跨った彼は、足を降ろしてじっと夏輝を見ていた。夏輝は彼の顔に見覚えはない。

（あの不良……誰だ？）

夏輝が彼をじっと見返すと、彼はちょっと驚いて、急いで自転車をこぎ出した。いつからいたのだろうか。夏輝は特に気にもせず、第三楽章を弾き始めた。

それが、初めての邂逅である。

父との関係は回復せず、寧ろ溝は深まるばかりだった。楽団でも最近はずまくいかない。

そんな気分を晴らすため、夏輝は今日も河川敷に来てチエロを弾いていた。曲は前回と同じく、エルガーのコンチェルト。いつもと変わらない。そんな時。

「！」

彼はいつもと違う空気を感じ取った。何か異様なものが近づいてきている。何か風を切って、この近くで移動している。

「うわっ！」

それは、風が集まるような渦巻きを作って夏輝の前に突如として姿を現した。急に姿を見せたのは自分と同じくらい背丈がある男だった。夏輝はこの男を見てはっとした。この間、自分の家で見たまき巢だ。

その空き巣の男は、夏輝の前に立ち、彼に襲いかかろうとした。その刹那。

ゴッ

その男の頭が打ち落される。何か彼の頭に打ち下ろされ、彼はそのままそこに倒れた。

「その音色を止めるなよ」

男の後ろから現れたのは、いつかの髪を茶色く染めた少年だった。近くで見ると、銀色のメッシュが三本入っている。筋金入りの不良だ。

「あ、アンタ、大丈夫？」



「え……ああ、はい」

状況がよく飲み込めないまま、とりあえずの返事しておく。

「この人捕まえて人質にしようって腹だったんだろーが、そうはいくかってんだ。観念しろ、この泥棒妖怪」

妖怪？

ますます事態が飲み込めなくなった。

「迷惑かけて悪いね。コイツはここんとこ空き巣事件を何件も起こしてる問題の奴だね。俺はコイツを追ってたんだ」

男の襟首を引っ掴んで指を差す彼の顔はまだあどけない。しかし、何とか最低限の事情は飲み込めた気がする。

だが、目の前で突然現れたからくりといい、説明できないこともまだ残っている。そもそも、泥棒なら少年の方がしそうだ。

「あの、何で、この男は突然現れたんですか……？」

「ああー、それは……映画の撮影とでも思っというて」

適当にはぐらかす少年に、夏輝はなおも食い下がった。

「この男、何か違う感じがしました。普通の人間ではないような何か、異様なものが。それは突然現れたからくりと何か関係が？」

少年は無表情で黙っている。彼は笑い飛ばすのだろうか。それとも蔑むのだろうか。だが、もうどうにでもなれ。そんな気持ちで、

夏輝は少年を見据えた。

「……ちゃんと説明するよ」

夏輝のどの予想にも外れ、少年は真面目な顔で静かに語り始めた。妖怪とは何なのか、を。

「……まあ、そういうこと。この妖怪は姿を消すことができるって  
いう能力を持つてて、逃げ足も速いもんだから、急いで追いかけて  
たんだ。気配だけで負うつてのは意外と難しいもんでね。アンタの  
所で足を止めてくれて助かったよ。……さあ、この話を信じる？信  
じない？まあ、アンタの自由だ。笑い飛ばしてくれてもいいし、警  
察を呼んでくれてもいいよ。逃げるから」

そこまで堂々と言い放つと逆にすごい。

「信じます」

夏輝は、静かに言った。

「今まで、何のことかわからなかった。自分の感じている感覚が何  
故常人とは違うのか。やっとわかりました。それに、あなたは嘘を  
言いそうにない」

夏輝がそう言って彼を見ると、彼は照れ隠しのために首の後ろを  
手でもみながら、視線を逸らした。

「……まあ、自分に無益な嘘は言わないけど」

その仕草がどこか幼く、かわいらしく見えて、夏輝は思わず微笑  
んだ。

その後、妖怪を枢要院へと引き渡すために後ろ手を縛ると、そこ  
に一人の男が現れた。

「父さん」

「夏輝、まだここにいたか。楽団から電話があつたぞ。練習を無断  
欠席したそうだな」

夏輝が俯くと、父は少年を値踏みするように見た。

「誰だ、君は」

「どうも、初めまして。が、先だと思っけど」

「父さん、彼に話を聞いていたんだ」

「話？何のだ？」

そこで夏輝は父に全部を話した。たった今少年から聞いたことを。

「お前、よもやそんな話を本気で信じているわけじゃないだろうな」

父は怒りで声が震えている。

「僕は……」

「お前もお前だ！どこの誰かはわからんが、私の息子に変なことを吹き込むな！」

彼が少年に怒鳴り散らすと、少年は挑発的に首を竦めて、更に挑発的な言葉を続けた。

「お宅の息子さんは話のひとつも満足に自分で判断できないんですか？そうなるかと教育の問題だと思いますがね」

「お前……っ！」

「血圧を下げるには大豆がいいですよ」

父の怒りをひらりと躲して、おちよくる。夏輝にはこの光景が信じられなかった。

「お前、勝手なことを言うかと許さんぞ！そもそも何だその髪は！分別つてものを持ってないのか！」

「お父さんこそ、人を見かけで判断しないという分別はお持ちでないんですか？」

「っ……とにかく！変なことを息子に吹き込むな、迷惑だ！」

「そう言われてもねえ……もう言っちゃったし」

べ、と舌を出す少年に、父は顔が真っ赤になるくらい憤慨した。

「もういい！夏輝、早く家へ帰れ。お前は一回医者に見せる。お前の言うことは信じられん！」

チェロを早くしまうように父が夏輝の腕を押す。しかし彼は、それに反抗した。

「そもそも彼が言ったことが真実だ！」

「お前のことは信じられないと言っているだろうっ！」

抑え込まれてしまった夏輝に、少年が横から口をはさんだ。

「人ん家の親子喧嘩に水差すような真似したくねえけどよ……アンタそれでも父親かよ！」

急に声を荒らげた少年に、夏輝と父の体がびくつと震える。それほどまでに、この少年は声に力を持っている。

「子供の言うこと百パーセント信じるのが親なんじゃねーの？信じられるから親なんじゃねーの？だから子供は安心して、親を信じらんじゃねーの？ガキの戯言って思うかよ？そりゃ結構だけどよ、まづ自分顧みろよ！」

今度は父が抑え込まれる番だった。いつもなら再び怒鳴り散らすなりしていただろうが、今回はそれができなかった。この少年がそれをさせなくしていた。そうさせない雰囲気、彼は持っていた。

「ぐっ……」

「あーあ、やっぱ柄じゃねーわ。ごめん、続けて」

少年は詰まる父を知ってか知らずか欠伸をして、その場から一步引いた。

「あの……あなたは？」

「俺？俺は四季春一。妖万屋さ」

名乗った彼の横を、風が吹き抜けた。その時彼が輝いて見えたのは、太陽のせいだけだろうか。

「ねえ、ナツキさん、だっけ。俺と来ないか？」

「え？」

「俺と妖万屋をやらないか？アンタなら歓迎する」

輝き、嬉しそうに笑う彼の顔に、自然と笑顔がこぼれる。

「夏輝！」

無粋な父の声も、今は聞こえない。

「はい」

春一は遊園地に行くことが決まった子供のように笑った。夏輝が理解者に出会えた瞬間だった。



結果的に、夏輝は春と一緒に暮らすことになった。

父を説得するのは容易ではなかった。枢要院から金銭が支払われるから、と無理やり説得した。父と母はそれに呆れ、海外へ移住してしまった。一時は勘当するとまで言い放っていた両親だが、それから一年後、夏輝の出した手紙に返事があり、そこに和解を申し出る内容がしたためられていた。

両親が予想以上に海外を気に入ってしまったため、今も日本にいるというわけではないのだが、それでも手紙のやり取りはしている。そういう意味でも、夏輝にとって春一は恩人と言えた。

夏輝にとって春一は妖万屋の師匠であり、時々とても世話のかかる我侭な弟だ。

「ねえ、夏」

「何ですか？」

二人での暮らしに、春一は常に満足そうだった。今まで一人でやっていた家事を夏輝が全てやってくれるのだから、それも納得できる。二人暮らしを始めてすぐの時、春一が洗い物をする夏輝に話しかけた。

「……あのさ、最初から言おうと思ってたんだけど。その、何で敬語？俺さ、アンタより年下なんだけど。敬語を使われるとき、その、何だ。そう、くすぐりたいんだけど」

バツの悪そうに言う春一がどこか幼く見えて、夏輝は笑いを隠せなかった。

「何がおかしいんだよ」

「いえ、すみません」

「だーかーらー」

「クセですよ。基本的に敬語を使う人間ですし。それに、妖のことで言ったら私よりハルの方が上ですから」

「だからって子供に敬語使わなくてもさー」

「大人子供は関係ありません」

「律儀だねー。……まあ、いいか」

不服そうに呟き、春一は読みかけの本を閉じた。

「そういえばハル、前に『音色を止めるな』って言いましたよね。

あれは、どういう意味ですか？」

「耳聡いねー。……俺さ、夏のチェロ大好き。好きな音色を止められたくないと願うのは普通だろ？」

「ああ……」

そんな風に言われたのは初めてだった。子供らしい、率直な感想だ。その証拠は、彼の純粋な無垢な笑顔を見ればわかる。

「ありがとうございます」

「よせやい」

春一は手を振って、ソファに寝転がった。照れている顔を見られたくないのだ。夏輝はそれ以上何も言わず、洗い物に戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0948y/>

---

TRUMP?

2011年12月11日18時46分発行